

私たちの召命

～病める人と共に75年～



宗教法人 お告げの MARIA 修道会

聖 MARIA 病院

私たちの召命

～病める人と共に75年～

本誌題名の“召命”とは「神様からの呼びかけ」という意味です



理 念

「自分を愛するように 他人を愛しなさい」

(聖書のことば)

聖マリア病院は、

カトリックの精神に基づき、
地域の皆様の要望に応えながら

いのちの尊厳と

心と体と魂の癒しのために
行き届いた医療を目指します

病院ロゴマーク



St.Mary hospital

MARIAのMと

手をつなぐ患者様と職員をイメージしました

提案者 前院長 梅木 公子

2000年3月29日

目次

理念・ロゴマーク	2
挨拶	
代表役員 下窄 優美	6
院 長 山中 淳子	7
祝 辞	
カトリック長崎大司教区 大司教 ペトロ 中村倫明	9
五島医師会 会長 医療法人雄仁会 浦クリニック 院長 浦 繁郎	10
医療法人恵愛会 ヨゼフクリニック 院長 高木 正剛	11
寄 稿	12
75年の歩み	21
聖マリア病院と私	36
部署紹介	41
委員会紹介	52
地域に向けた取り組み	57
院内行事	61
職員メッセージ	67
若手職員が院長先生に聞いてみた	72
今後の展望	79
資 料	
病院概要	83
歴代代表役員・院長・事務長・看護部長	85
組織図	86
平面図	87
年 表	90
編集後記	92

挨 拶





聖マリア病院設立 75 周年に寄せて

宗教法人 お告げのマリア修道会
代表役員 下窄 優美

聖 マリア病院の設立75周年おめでとうございます。これまでの歩みをお支えくださった方々、故人となられた方も含めてすべての方々に心から感謝いたします。

聖マリア病院の歴史を見る時、小さい人々の上に働く神様の力に感嘆せずにはられません。病弱な慈恵院の子どもたちのために医師を養成しよう、しかも会員の医師を養成しようという無謀にも思える当時の主任司祭と会員の取り組みは、最初の医師であったシスター濱崎タカの東京女子医専への進学によって実現へと近づきました。医師を育てるために他の会員たちは必死に働き学費を捻出しました。やがて開設した奥浦慈恵院診療所は福江に移り、聖マリア診療所が開設されました。そして75年を経て今も下五島の医療を支える大切な役割を果たし続けてきています。

病院の名前に戴いている聖マリアとはもちろんイエス様の母であるマリア様です。イエス様は十字架上で息を引き取る直前に、母マリア様に愛する弟子ヨハネのことを「あなたの子です」と、ヨハネにはマリア様のことを「あなたの母です」と言われました。この言葉によってイエス様は、マリア様をヨハネに託し、一方、マリア様にはヨハネに代表される人類全体（幸いなことにここに私たちも含まれます）を託されたのです。ですから、だれもが何の遠慮もなく、マリア様を「おかあさん」と呼んでいいのです。病院の玄関ではマリア様の像が来院される方々を迎え、「よく来たね、きつかったね」と言ってくださるかのようです。また、聖マリア病院の小さなドームにはマリア様の像が立っていて五島の町と海を見守ってくださっています。聖マリア病院のスタッフの皆さんはこのマリア様の目となり手足となって、命の尊厳を守り、医療が必要な方々に治療だけでなく、心の癒しももたらすために励んでおられます。これこそが聖マリア病院がこの地にあることの理由です。これからもマリア様の見守りの中で歩んでいきましょう。



信仰に支えられて 喜びのうちに

聖マリア病院
院長 山中 淳子

聖マリア病院が現在地で医療を開始してから75年目を迎えました。これまで地域の皆様に受け入れて頂き、育てて頂き、今も共に歩ませて頂いていることを感謝し、すべての関係者の方々に心からお礼を申し上げます。誠にありがとうございます。

聖マリア病院がこの地で医療活動を始める前に、実は長い歩みがありました。その歩みについてはこの記念誌で詳しく紹介しますが、それは見捨てられた子どもたちを養い育てるという活動でした。この活動を主導したのは故国を捨てて宣教に身を投じた若きパリ外国宣教会の神父様たちで、共に働いたのはキリシタンの女性たちでした。キリシタン禁教の時代が終わりやっと信仰の自由が認められて、女性たちが勤しんだのは外国人の神父様に請われるままに従った活動でした。若き神父様たちを、そしてキリシタンの女性たちを動かしていたものは何だろうかとはしばしば考えます。目に見える報酬はなく、むしろ貧しさと疲れの苦しい日々であったに違いありません。しかし彼ら、彼女らの心には確かな満足感があったと思います。人の力を超えた存在を知っていた彼ら、彼女らは、その存在から与えられる静かな喜びに動かされていたのではないかと想像します。私たちもその喜びを感じ、その喜びに動かされ、それを受け継ぐ使命を感じます。

子どもたちの養育事業が医療活動に繋がり、聖マリア病院へ発展しました。それは時の必要に応じた活動でした。今、日本は少子高齢化の中にあり医療界も対応策を模索しています。時の流れの中で聖マリア病院も今の時代に必要な役割を果たしていかなければなりません。「自分を愛するように他人を愛しなさい」という先輩たちが身をもって生きてきた信念を大切に、今、必要とされていることを敏感に感じ取り、お役に立てる病院であるよう、今後も努力を続けてまいりたいと思います。どうぞこれからもよろしくお願い致します。

祝 辞





聖マリア病院開設 75 周年記念に寄せて

カトリック長崎大司教区
大司教 ペトロ中村 倫明

聖 マリア病院開設75周年おめでとうございます。

そして、特に地元のカトリック信徒の皆様がお世話になっていきますことに、教区を代表して感謝申し上げます。また勿論、カトリック信徒だけでなく、すべての方々の命にご奉仕くださっておられますことにも敬意を表します。

わたしは下五島出身ではありませんし、それに司祭として下五島の教会へ一度も赴任したことはありません。ですから、福江の聖マリア病院に通院したこともありません。ただ、長崎市小江原に以前開設されていた同じ系列の聖マリアクリニックに何度かお世話になったことがあります。

わたしが司祭になって駆け出しの頃、なかなか咳が止まらず、聖マリアクリニックに行って胸のレントゲンを撮ってもらいました。その時のシスター松永院長の診断の言葉は次の通りでした。「これが神父様の胸の写真です。神父様の心は、きれいですね。」簡単に信用してくれない方々のためにも「わたしの心はきれい」ということを証明するために、その時のレントゲン写真を、ご無理を承知で頂きました。いまでも大切に保管してあります。

病いは気からではありませんが、聖マリア病院は、身体の診察だけでなく、心の診察もして下さるところです。わたしたちを単なる生き物ではなく、心を持った、そして、何よりも神さまから愛されている尊厳ある存在として、大切にしっかり向き合ってくださいます。

あのフレッシュで若々しい希望に満ちていた時代からだいぶ時間がたちました。わたしの心もだいぶ汚れていることだろうと思います。手遅れで手が付けられなくなる前に、今一度診断してもらい、新たな胸の写真を撮ってもらわなければいけないかもしれませんね。

どうぞこれからも、聖マリア病院を訪れる方々が、聖マリア病院を通して働かれる神さまの癒しの業に触れることができますように、長崎教区民一同心より望みお祈り申し上げます。



聖マリア病院の開設 75 周年によせて

五島医師会 会長
医療法人雄仁会 浦クリニック
院長 浦 繁郎

聖 マリア病院が開設75周年を迎えられるに当たりお祝いを申し上げます。

1880年（明治13年）宣教師マルマン神父により、大泊子部屋が開設され（日本で2番目にできた児童福祉施設と聞いてます）、1909年（明治42年）奥浦慈恵院となり、同所に診療所併設を経て、1955年（昭和30年）現在地に聖マリア病院が開設されています。（私が中学時代に通学する時、病院の前を通りながら白い建物で静寂で厳かな雰囲気を感じていました、もう55年以上も前の話ですが・・・）2000年（平成12年）現在の新病院が竣工されています。（コロナワクチンの初回接種ではお世話になりました）

この間、五島地域の住民の人生、児童福祉、医療、老人福祉への貢献は私の想像を遥かに超えるものであろうとの思いがします。

「自分を愛するように他人を愛しなさい」

孤児や捨て子を何とかしなければという思いから、子どもたちを保護し育てたことが発端となって修道会と病院が創設された、このような思いはとても我々の及ぶところではありません。これからもこの理念のもと発展されることを願いましてお祝いの言葉とさせていただきます。我々医師会もお手伝いできることがあれば協力いたします。

聖マリア病院の皆様のご多幸をお祈りいたします。

創設75周年おめでとうございます。





シスター梅木先生の思い出

医療法人恵愛会 ヨゼフクリニック
院長 高木 正剛

聖 マリア病院開設75周年お目出度うございます。3/4世紀もの長きにわたり、五島の地の塩として、静かに着実に優しく病める人々を励まし治療し、心の支えとなられて来られたことに深甚の敬意と感謝を捧げます。生涯を信仰と五島の医療に尽くされ、清貧に甘んじられ黙々と弱者のために心身をすり減らして来られたことの素晴らしさは言を俟ちません。

中でもシスター梅木公子先生は聖マリア病院を近代的な佇まいの充実した医療施設にされ、久留米聖マリア病院と提携されましたことは特筆に価します。長い離島での医療活動では遺憾に思われることも多々あったと思いますが、すべてを胸に収められさりげなく優れた次世代に継代され旅立たれた先生の生涯を、御恩を受けた者として語り続けたいと思います。

先生との出会いは中島萬利神父様が時々開かれていた医学生の会でした。神父様は先生が東京から帰省されて参加されるのを待ち侘びているようでした。普段は厳しく優しい神父様が、先生が参加されると優しい優しい神父様に豹変されるのは魔法でもかけられたかのようなようでした。先生は第一内科で研修され、東大出の高岡教授や橋場教授からも厚い信頼を得ておられました。私は外科に入局し、時々郡家病院に派遣されることがありました。先生から堂崎の松下佐吉神父様と食事をしましょう、とお誘いがあり、先生が夕食を私が酒肴を準備して先生の運転で出かけました。お二人の禅問答のような会話を聞き乍ら異次元の世界に迷入した感じもありました。9時近くになると先生が、さあ帰りましょうと違を告げられるのですが、どのようにして帰ったかは50年以上経過しよく覚えていません。このような世界に誘われたことが数回ありました。小生が54歳で大学を辞した時に温かい救いの手を差し伸べてくださったのも先生でした。心残りなのは、蜘蛛膜下出血の後で不全麻痺のため電動車椅子を使いたいというご希望があったのですが実現しませんでした。思い切ってプレゼントしておけばバリバリ働かれたのではなかったかと残念です。

今後、聖マリア病院の重要性はさらに増すと思います。スタッフの皆様のご健勝を祈願しています。

寄稿





聖マリア病院開設 75周年を心から慶び お祝い申し上げます

前事務長
シスター長谷川 スナ子

私は、各地の支部修道院が宗教法人お告げの
マリア修道会に統合される前に福江修道院
に入会し、学校卒業と同時に、修道院の事業所
である聖マリア病院の事務を執るようになりました。

当時は、レセプトの時期になると、深夜までレ
セプト書きをしていました。昭和48年11月に事
務長のシスター赤尾が亡くなり、昭和50年11月
には、初代院長のシスター濱崎タカが亡くなりま
した。後任にはシスター大川事務長、シスター濱
崎ミサヲ院長が就任しました。

昭和53年4月にシスター大川事務長が聖マリ
アの園に異動になり、私が後を継ぎました。経営
者も統合された宗教法人お告げのマリア修道会に
なりました。

この頃になると、職員も増え、職員旅行もでき
るようになりました。2泊3日で毎年、九州管内を
巡りました。平成元年に長崎の小江原に聖マリア
クリニックが開設されると医師や薬剤師、看護師の
シスターが異動になり、職員旅行も難しくなりまし
た。平成4年11月に、シスター濱崎ミサヲ院長が
亡くなり、シスター松永マサ子が後を継ぎました。

平成6年4月に療養型病床群の施設基準を取得
するにあたって、医師1名の増員が必要でしたが、
なかなか見つからず、3月30日採用、3月31日
申請、翌4月1日付で許可をいただきました。また、
福岡の新田原聖母病院様が、すでに療養型病
床群を開設していたので、1か月ほど、2名のシ
スター看護師が実習を受けさせていただきました。

シスター梅木公子は約22年間、院長を務め、

病院経営の安定化を図りました。平成12年7月
に現在の病院を建築し、多くの施設基準取得に努
め、平成31年4月には、計画していた地域包括
ケア病棟の許可を受けました。

聖マリア病院が今日あるのは、職員皆様の病院
理念に根差した惜しみないお働き、行政のご指導と
地域の皆様の温かいご支援のおかげだと思います。
今後とも、内容の充実に力を注がれるシスター山中
淳子院長とともに、患者さんにとっては心身の癒し
と安らぎの場、職員にとっては、風通しの良い、働
き甲斐のある職場になってほしいと願っています。

長期間、聖マリア病院に関わらせて頂けたこと
を心から感謝いたしております。未熟で不足だら
けの私は、歴代の院長、在職中の、また、退職さ
れた多くの職員の皆様に支えていただきました。
本当にありがとうございました。皆様と聖マリア
病院の上に神様の豊かな祝福をお祈りいたします。



高齢者に 手を差しのべる医療

元看護部長
シスター水浦 ふじ子

新人看護師から定年退職まで長きに渡り職務
に携わらせて頂きました。

私が看護部に入職した当初はまだ基準看護では
なく当直制でした。寝たきりの患者さんには家族
が付き添い、家族が付き添えない場合は家政婦協
会から派遣された付き添いさんがついていました。
ですから身体介護はすべて家族、又は付き添いさ
ん任せでした。寝たきり患者さんは今日ほど多く
なく始めのうちは3、4人ぐらいでしたが次第に
多くなり1人の付添さんが2人の患者さんを受け

持つことも多くなりました。一番多い時で10人近くの付き添いさんがいたと思います。当時の婦長は付き添いさんの斡旋に四苦八苦していました。付き添い料は基本的に公費負担でしたので高齢化の加速に伴い費用は増加の一途を辿ったと思われまます。ついに付き添い制度は廃止になりました。そして当院もいよいよ“基準看護”を導入することになりました。少しずつ看護職員を増やし、ある日を境に15対1の基準看護に変わりました。寝たきり患者さんの介護は看護師の手に任されたわけです。日勤中はまだ人手があるものの夜間帯は2人で看護業務に加え数回の排泄介助(オムツ交換)でくたくたになって朝を迎えました。(※今でもそうだと思います。お疲れ様です)次第に外が白み始めゴミを縛ってゴミステーションまで持って行き一息つくると日勤者との交替の時間です。この時の達成感とすがすがしい気持ちは何とも言えないものでした。それは中間管理職になってからは決して味わうことはできないものでした。

医療技術も勿論ですが患者さんのケア一つひとつを生き生きとこなしているスタッフの姿に幾度となく心を打たれました。

国の施策によって2000年から介護保険制度が導入されましたが、この少し前から「ケアマネージャー」ということばが飛び交うようになりました。梅木院長がよくこのワードを口にしておりましたが具体的なことはまだご本人もわかっていないようでした。私も何をどうするのか、具体的には何もわかりませんでした。そうこうするうちにケアマネージャーの資格試験のことが話題になり、当院からも数名が試験を受けることになりました。私も受けることにしました。私は甘く考え受験者の9割は合格するだろう、もし自分だけが不合格であれば恥ずかしいと思い、久しぶりに真剣に問題集と取り組みました。

問題集と取り組んでいるうちに漠然とではありますが介護保険制度がどんなものであるかがわかってきました。超高齢化社会に向けて日本がこれから施行する介護保険について理解を深めたことは良かったと思います。

さて、いよいよ受験当日を迎えました。『第一回介護支援専門員の試験』ということでバス停や付近の道路には受験生らしき一団の群れがあちこちにいました。バスの中の混みようは申すまでもありません。寿司詰め状態のまま試験会場に着きました。やっとの思いで疲れ切った体を指定された席におろした時はホッとしました。そして、答案用紙と格闘し解答が終わりました。帰りもまた寿司詰め状態の中に身を置き大波止まで向いました。皮肉にも試験を受けている間が最も開放された時でした。

1970年代から2000年までの間を見ても、みるみるうちに病院は高齢者で埋まり、疾病も変わってきました。高齢者の医療は人生の幕を閉じる時に関わるとても大切な医療です。認知症の方にもそうでない方にも手を差し伸べ、誰をも差別することなく公平に丁寧で忠実な医療を最期まで施す。認知症のケアがどんなに大変であっても最期まで看る。これが私が見てきた聖マリア病院のマインドです。イエス様が手を差し伸べて多くの病人を癒やされたように聖マリア病院もそうあり続けてほしいと願っています。





聖マリア病院 75周年に寄せて

元看護部長
シスター眞浦 茅乃

聖マリア病院 75周年おめでとうございます。私は聖マリア病院で43年間働かせていただきました。入職時は看護師とは名ばかりでその技術に追いつくの一生懸命でした。注射はもちろんですが、その前のアンプルカットが大変でした。注射を失敗しても「よかよか」と言ってくださいました。古い聖マリア病院は1階に詰所があり、1階から2階、3階の病棟へと行っていました。その頃は男女別の病棟で3階が男性、2階が女性だったような気がします。夜勤は受付の後ろに休んでいました。外来も割に多くて酔っ払いの患者様もいました。往診もカバン持ちで、荒川、増田方面にも行っていました。2階は西病棟、北病棟の名前があり、西病棟にはシスターたちが入院していました。私の注射の実験台になった人たちです。寝たきりの人には付き添いさんが付いていました。今の新しい病院になってから付き添いは廃止しました。

古い病院では給食を除いて関わりました。レントゲンの暗室、暗闇のほのかな光が懐かしいです。事務でのカルテ整理、薬局の薬包み、検査室の遠心機と顕微鏡、これらは私にとって病院をいろいろな面から見る尺度となりました。

新しい病院への転出は、3階病棟の療養型病棟への切り替えから始まり、介護職員を本格的に雇用しました。療養型病棟が始まった頃は患者様も割に元気で、毎月1回のレクリエーションが楽しみでした。スタッフが水戸黄門になったり鬼になったり、はたまたお姫様になったりし

ました。いつも笑いの渦でした。しかし、年月が過ぎると、患者様の状態が変わり、レクリエーション大会などはできなくなりました。経管栄養者、吸引・酸素必要者の増加です。そして終末期患者様の受け入れです。国の動向にも目を向けないといけないので、その後4階病棟を地域包括病棟に変換しました。終末期の患者様との出会いはやはり心に残ります。園長職を孫に譲った方は部屋に園児の写真を飾っていました。娘を残して死を迎えたお父さんは3歳の誕生日まで生きてと望みました。患者様に寄り添うとき、患者様からこちらが力をもらいます。

仲知に来て終末期の人を3名看取りました。看護師をやっていてよかったと思います。皆さん、家族に見守られて亡くなりました。聖マリア病院で勤務できたことを感謝しています。そして仲間たちに感謝です。病院が大変な時に助けていただきました。歓迎会、バーベキュー大会、忘年会、そしてクリスマス会、聖マリア病院の仲間は最高です。これからも聖マリア病院をよろしく願います。その笑顔と優しさで患者様に寄り添ってください。今はコロナで大変な時を迎えています。目に見えないウイルスに脅かされています。こんな時にこそ聖マリア病院の理念が生きるのではないのでしょうか。聖マリア病院と職員の皆様の上に、神様の恵みと祝福が豊かにあるようお祈りいたします。本当におめでとうございます。





開設75周年
おめでとうございます

非常勤職員
赤尾 貴代子

聖 マリア病院開設75周年にもなるんですね。私は40年務めさせていただきました。勤め始めた当時はシスター方が多く、祈りばかりしなやかと心配しました。その頃、男性職員は、皆から“賢にいちゃん”と呼ばれていた濱端さん1名で、みんなから頼りにされていました。アットホームな雰囲気、食堂に集まって昼食を取ったこと、ボーリング大会、遠足、忘年会の時には、部署単位で出し物を考えていて、普段おとなしい給食のおばちゃん、医局のドクターのギャップがすごすぎて、驚いたことなど、いろいろ思い出します。

仕事を離れた今でも、スーパー等で昔なじみの患者様が覚えてくださっていて声かけしていただいたりして、それが一番嬉しいですね。まだまだ病気等でお世話になるとは思いますが、地域の病院として頑張ってください。ありがとうございました。



リハビリ室開設から現在

元職員理学療法士
シスター平本 トシ子

1 989（昭和64）年1月8日昭和天皇がご逝去されました。また、この年にバブルが崩壊し日本は30年不況といわれるものに突入しました。

私は平成元年4月、聖マリア病院に入職しました。旧病院西病棟の1階病室を改修、リハビリ室を準備していただき、必要な設備も揃えて開始させていただきました。ほとんど私の裁量にまかせていただき、やりがいのある毎日を送れました。患者様も元気な方がほとんど、独歩、会話もでき、外来に毎日通われる方も多く、賑わいある仕事でした。

平成12（2000）年、介護保険の開始にあわせ、新病棟建設となりました。旧聖マリアの園デイサービスセンター跡を改修した現在のリハビリ室で業務継続し、現在に至っています。

平成22年より久留米聖マリア病院よりスタッフ1名出向していただくことになり、スタッフ4名となり、その後令和元年、地域包括ケア病棟開設に伴い、施設基準2取得のためスタッフ1名追加し、計5名で業務に励んでいます。

リハビリ室開設34年目。患者様の状況はだんだん重症化傾向ですが、何度かリハビリされた方との出会いもあり、時代の流れも感じます。

ほとんど苦労はなく、患者様との交流で癒やされたり、教えられたりの日々でした。この仕事に従事出来たことを感謝しています。これからの若い方々も、この仕事を通して多くを受け取ったり学んだりしてほしいです。





開設75周年 おめでとうございます

医事課会計
竹口 陽子

私が入職した当時、聖マリア病院は3階建てで、院内には消毒液の香りが漂っていたのを思い出します。職員も現在のように多くなく、男性職員は1人、今では考えられません。

入職時、私は受付に配属されました。患者様のお顔もお名前もなじみなく、正直続けられるのか不安しかありませんでしたが、周りの先輩方のアドバイスを受けながら仕事をしていました。あの当時、私が診察室にカルテを持って行った時の事です。前々院長の濱崎ミサヲ先生が毛抜きを差し出しながら、「あんた、あんた、ここに白髪があるけん、これで抜いてくれんね」と言ってきたので、私はドキドキしながら抜いてあげました。不安を抱えて仕事をしているのを察しての事だったと思います。

そして、前院長の梅木公子先生ともたくさん思い出がありました。料理のレシピを教えていただいたり、いきなり英語で話しかけられ英語の授業が始まったり、こちらが忙しくしていてもおかまいなしで話を振ってこられるので、無い知恵を振り絞って速攻授業に参加した事、昼休みに現在の大会議室で毎日卓球をして遊んだ事、いろいろ思い出します。梅木先生は運動神経が抜群で、ものすごいスタイルでスマッシュを打ち込んでくるのです。こちらも負けずに打ち返そうと必死でした。

その夜、私は具合が悪くなり、よくよく考えたら、午前中にインフルエンザの予防接種をしたばかりで暴れすぎた為でした。今では何もかも懐かしく思います。

それから大きな出来事がありました。それは入職させていただいた病院が新しく建築された事です。取り壊されていく病院を見ていると寂しい思いもありましたが、少しずつ出来上がっていく新病院を目にすると、初心に戻って頑張らなければいけないと思いました。

私は今の部署で長年仕事をさせていただいておりますが、自分の中で大きな事件が起きました。それは電子カルテの導入です。紙カルテで一つ一つ薬価を見て計算していたのに、電子カルテ移行になり、キーボードでカチャカチャするなんて絶対自分には無理なことだ、どうしよう、と何度もスランプに陥った事もありました。今の若い人達はパソコン相手には動じないと思いますが、この私には冷や汗ものです（今もですが）。しかし与えられた仕事なので、最後まで全うしようと思っております。

今ではとてもかわいく頼もしい後輩も出来たので、チームワークを大事にして、これから山中先生と共に、聖マリア病院がいつまでも愛されるよう、理念に基づきながら日々努力してまいりたいと思います。





患者様と同僚に支えられ

調理員
松本 広美

入職して2年位は、覚えることがたくさんあり大変でした。

当病院では、大まかに一般食と特別治療食とソフト食に分かれていて、最初に翌日分の献立表をもとに、食種ごとに人数分の食材を割り出します。次に固めておくデザートや料理等は、前日のうちに作っておきます。調理当日に下準備する野菜や魚類は、主菜、副菜、汁物ごとに分けて計量し保管しておきます。一食ごとに調理して器に盛り付けし全ての料理が揃っているかチェックをした後、提供されます。今使っている保温食器は平成20年頃に導入されました。

配膳を覚えたての頃、焦って失敗してしまった時にシスターから「たった一品の間違いと思うかもしれないけれど、患者様にとっては、大事な一回の食事だから気をつけてね」と優しく言われたことが、今でも忘れられません。

給食の仕事は朝が早く、子育てをしながらだったので、悩んだり辛い時もありました。雪の日や台風の日等は泊まり込んで対応した時もあり、大変な仕事ですが、一緒に働く同僚達が居てくれたことと、病棟から返ってきた食器の中に時々、患者様からの労いの言葉が書かれたメモが添えられているのを見た時等は、やりがいを感じますし、この仕事を続けてきて良かったとも思います。

聖マリア病院がこれからも、入院患者様や地域の方々に愛され続ける病院であってほしいと心から願っています。



患者様と職員の為に 快適な環境づくりを

ハウスキーパー
清水 久幸

聖マリア病院開設75周年おめでとうございます。この75年に亘る歩みをなしてこられたことを喜び、祝い、そして皆様方と一緒に働いている事を嬉しく素晴らしい経験だと感謝しています。

今、聖マリア病院でも近年の少子高齢化問題や、医療の高度化、専門化といった環境変化を考えながら、それに対応できる雇用の在り方、人材の育成が期待されていきます。その一方で、職員が働きがいのある職場環境、雰囲気を出産院内に醸成することが、職員一人ひとりが聖マリア病院で働くことの意味と誇り、喜びを自覚することになり、何にもまして人材対策になると思います。そのためにも、職員同士の連帯感や仲間意識を強め、安心感と自己及び他者との信頼関係を育む方向へと導くリーダーシップが肝要になる為、部分や個々には不完全な面があるとしても、病院全体が前向きで明るく、温かな雰囲気に包まれることが、地域から一定の評価を受け、ひいては人材を呼び込むことにもつながると思います。

私自身、聖マリア病院に入職できたのも皆様の理解があつての事だと深く感謝しています。ありがとうございます。だからこそ恩返しという訳ではありませんが、これまで育んだ知識と技術を発揮して、病院の理念にも謳っているように、地域の皆様、患者様には安全かつ快適に受診、療養ができるよう、また職員の皆様にも円滑な業務ができるような環境づくりに努めて、常に感謝の気持ちを忘れることなく一日一日を一生懸命頑張っ

行きたいと思います。

今後とも聖マリア病院が地域の皆様に愛されて、ますます発展されることを心よりお祈りいたします。



聖マリア病院での思い出

地域包括ケア病棟看護師
松田 奈保美

7 5周年おめでとうございます。

旧病院の応接室で緊張しながら面接を受け、採用していただいてから随分長い時間が経ちますが、思い出してみるとあっという間だったような気がします。

気付けば人生の半分以上、お世話になっていました。看護学校を卒業して1年後に帰郷し病棟勤務や夜勤の経験がなく不安ばかりの私でしたが、院長先生はじめ優しい先輩方に助けていただき、今日まで来ることが出来ました。懐かしく思い出すのは、夜勤の始まりに儀式のように外来の廊下に濡らした紙を撒き、箒で掃いた後モップをかけていた事、夜勤の仮眠を受付奥にある二段ベッドで取り、ナースコールがあると転がるようにベッドから降りて病棟のある2階、3階へ駆け上がっていた事、時間外に点滴に來られた程よく酔っぱらった患者様に追いかけられた事など、インシデントレポートなどの言葉も知らなかった、よく言えばおらかな昭和でした。何より子どもの頃、教会で聖歌やカトリックの信仰について教わっていたシスター方と働いていることが不思議な感覚でした。

その後、年号の移り変わりとともに看護体制も

変わり、電子カルテの導入や新病院の設立など様々な変革に戸惑いながらも、どうにか今まで働いてこられたのは、聖マリア病院だったからだ感謝しています。若いときは特に感じてなかったのですが、年齢を重ね少しは経験を積んだ今は、地域の人々になくてはならない病院だと心から思います。残り少なくなった看護師生活だと思いますが、今度は後輩にも助けてもらいながら、少しでも病院理念に近づけるように努めていきたいと思いま



「マリア病院に来てよかった」と喜んでいただけるように、働きたい

地域包括ケア病棟看護師
Sr. 松永 晴美

病院を訪れる方は、何らかの痛みを抱えている。それは、自覚することもないほどの小さなものから、人としての尊厳を壊すほどに大きなものまで様々。そして病院はその痛みに関心を感じて癒す働きを求められていると感じる。

言葉で言い表すことのできるものは、ほんの一部で、表情や態度、仕草などちょっとしたサインが、適切なタイミングで察知されて癒しへ向かっていく。

今日は、何をやっても上手くいかないという日がある、逆に何事もスムーズに受け入れられる心大らかな日がある、といった具合にタイミングも千差万別なのである。いつでも満点という人なんていないのと同じで、いつも痛いことばかりの人もない。時と場所、場面や環境で物事は良くも悪くもなる。だから、今日の具合を静かに見つめる別の目で自分をみて、あちよっとやりすぎ、くどいとか、いや無駄に落ち込んでいるななどと

冷静に自分と向き合えたらうまく感情をコントロールできるのではないかと思う。

病院の玄関を潜る人は、病人として来る方ばかりじゃない。家族であったり、業者であったり、実習生や招待客である場合もある。様々な用であらゆる方々が来られる。その誰もが一人ひとり違ったニーズを持って訪れる。確かにそのすべてには対応できないが、全く思いもよらない偶然が、癒しの一助になることもあるのだ。「何かしら心が軽くなった」「来てよかった」とふと感じるそんな場所になれば、と常々思う。

落ち着いて休める、不安なことが言いやすい、安全で安心できる、と感じてもらえることを目標にして日々精進していくなら、いつの間にか喜びの輪を拡げていけると思う。

いったいどうすれば、それができるのかを考え、自分がこうされたらどうだろう、あるいは、こんな時どうしてもらいたいかと折々立ち止まって考える。反省してはやり直すことを繰り返していくこと、地道なこのプロセスを力まずに続けていく、それしかないと思っている。

「マリア病院に来てよかった」としみじみ感じてくれる方が増えますように、小さなことから始めよう、くじけずに励もう、少しずつ成長しようと祈りながら日々働いている。



記念誌表題「私たちの召命～病める人と共に75年～」は深堀実先生の提案です。深堀先生にこの表題に対する思いを書いていただきました。



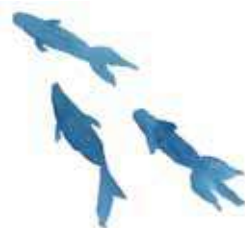
表題へ寄せる想い

医師
深堀 実

この病院の源流を辿ると、明治初期の“子部屋”に辿り着きます。その精神は、子部屋、女部屋、慈恵院、マリア病院と受け継がれてきました。そこには、常に時代の要請に応じて生きた人々の姿がありました。それはまさに日本のミゼリコルディア（慈悲の精神）の夜明けでした。

“時代の要請”とは、まさしく神の声、神の呼びかけそのものでした。その呼びかけ（召命）を、はっきりと聴き、それを実践し、生涯を捧げた多くの先達が居たのです。その先達によって命のバトンは受け継がれてきました。

その精神を受け止め、職員、一人ひとりの召命に応える場が、マリア病院でありたいものです。私達の仕事は、ただ単なる生活の糧を得る手段ではありません。自分の召命に応える実践の場でありたいものです。



75年のあゆみ



1549-1873

天文18年～明治6年

- 1549 フランシスコ・ザビエル、日本にキリスト教を伝える
- 1587 豊臣秀吉、バテレン追放令を出す
- 1597 日本二十六聖人長崎西坂で殉教
- 1614 幕府、禁教令を出す
- 1863 パリ外国宣教教会神父長崎へ来る
- 1865 大浦天主堂で浦上の信徒が信仰を表す **【信徒発見】**
- 1867 浦上四番崩れ
- 1870 浦上キリシタン約3000名流刑
- 1873 禁教令解かれキリシタン帰還



信徒発見の MARIA 像
(大浦天主堂)

【信徒発見】

250年余りのキリスト教迫害後、日本にキリスト教信者はいないものと思われていた。殉教の地・西坂を向いて建てられ、日本二十六聖人に捧げられた大浦天主堂の献堂式から一か月後・・・

大浦天主堂のサンタマリアのご像の前でイザベリナ杉本ユリが、プチジャン司教に、「ここにおります私たちは皆あなたさまの心と同じでございます」と潜伏キリシタンの残存を告げた。長崎における信徒発見である。

1873(明治6)年の禁教令解除はお告げのマリア会にとっても記念すべき日であった。「創立者は誰ですか」と問われて返事ができない修道会は稀であろう。しかしお告げのマリア会は創立者を特定できない。「創立者は神様」これが会員の一致した結論である。

1957(昭和32)年3月15日、22名が初誓願を宣立した。いみじくもそれはこの信徒発見のサンタマリアのご像の前であった。

お告げのマリア修道会史 「礎」より





キリスト教伝来～流刑からの帰還



【日本二十六聖人】

6名の外国人と20名の日本人が豊臣秀吉のキリシタン禁令のため大阪・京都で捕えられ、長崎に護送され処刑された。

このできごとは、ヨーロッパその他に広く伝わり、1862年ローマ教皇は、26名の殉教者を聖人に列し、「日本二十六聖人」と称せられた。



【浦上四番崩れ】

長崎では信徒発見後、江戸幕府初期の寺請制度以降檀家になっていた浦上キリシタンが、仏式の葬儀を断り、寺とは縁を切りたいという旨を庄屋に申し立てました。これは徳川幕府が歴代励行してきた「組法」に対する抵抗運動で、大きな問題となりました。

1867年7月15日午前3時頃、長崎奉行所は土砂降りの雨の中、浦上キリシタンの主要人物の寝込みを襲い、次々に逮捕。これが【浦上四番崩れ】の始まりです。浦上崩れの一番から三番までは噂や密告による検挙でしたが、四番崩れは自ら信仰を表明したことが発端となりました。

翌年、江戸から明治へ政権交代されても手は緩められず「全村民3,394名を21藩22か所へ流刑し棄教を強いる」という類をみないとも厳しい命が下されます。しかし村民の心は明るく、流刑を「旅」と呼びました。流刑から帰還したキリシタン女性たちが、伝染病などで親を亡くした子どもたちの世話を始めたことが、修道会のはじまりの一つとなりました。



日本信徒発見150周年
記念「旅」殉教への門出
(浦上カトリック教会)

1880-1909

明治13年～明治42年

- 1880** 宣教師マルマン神父が奥浦村大泊の民家で子どもたちの世話をさせる（大泊子部屋）
- 1883** 手狭になった大泊子部屋を堂崎に移転
- 1899** ペルー神父、私財を投じ奥浦赤瀬に土地を購入開墾
- 1901** 赤瀬に子部屋移転
- 1909** 子部屋が認可され、養護施設奥浦慈恵院となる



記念誌作成委員会
大泊子部屋跡地にて

五島では、禁教令が解かれて信仰自由の喜びから、孤児、貧児、病人、老人の救済活動が行われるようになりました。しかしその時でも貧困、奇形、重度心身障害者、双子を間引きするという、貧しさより大きな悲慘があることを見た産婆梅木マセは、五島に赴任してきたマルマン神父に報告。すぐに大泊に5人の子どもを収容したことが、奥浦慈恵院のおこりです。

よき協力者に恵まれ、キリスト教信者の乙女たちが会員となり、「ひとつの魂を救うことは全世界のすべてのものを手に入れることよりも価値があることだ」というマルマン神父の言葉を胸に、集まった子どもたちを神からうけた実子として大切に養育しました。

2年後、大泊では手狭になり堂崎に移転、計5回場所を変え、現在に至ります。

当時の収容児は0～3歳の乳幼児が大半で、母乳の代わりに与えられていた「ねりこ」という小麦をねったものは栄養価が低く、子どもたちは栄養失調になりがちでした。そこで会員たちは、母乳の出る女性を探し、子どもを託しました。この院外委託は、収容児の70～80%にのぼりました。一般的な院外委託は、養育してくれる希望者を募り、希望者が自費で養育していたのに対し、奥浦慈恵院では、適切な家庭を探し出して委託を願い出たため、委託費をその家庭ごとに支払っていました。





修道会のおこり～慈恵院創立

会員たちは、土地を耕し、山野をめぐって山菜を採り、蚕を育て、紡いだ糸で機織りして昼夜働き、さらに委託費を得るために小間物行商で各地を巡っていました。小間物行商は現金収入のためだけではなく、巡回しながら闇に葬られようとしている乳児、障害児、虐待されている子どもたちを探して慈恵院に収容。さらに養子にいった子、委託している子のその後の状況を知り、必要であれば引き取るためでもありました。

探し出された乳児を救済するだけでは偶然的な機会に頼む場合が多く、彼女たちが望んでいる、より多くの命の救いには程遠いものがありました。そこで、出産前の指導によって墮胎を防ぐための援助を与えることができる助産婦となり、間引きせざるを得ない事情がある妊婦には出産の援助をし、出産後すぐに慈恵院や養子としてその乳児を引き取り、瀕死の状態で産まれた乳児には、洗礼を授けて罪のゆるしを与えたいと働きかけました。

会員たちは収容されている子どもたちを養育していただけではなく、助産婦による墮胎、中絶、間引き防止のための事前の指導、養育など、予防的な活動を行っていました。

地域の人々は、墮胎、中絶、間引きが良心的に悪であると理解していても、貧困のためやむを得ないこととして受け入れていました。この悪習に目を留め、ひとつの人格を尊重するという、人間性の本質を明らかに示したのが、この共同体の救済活動であり、公の場に現われる救済活動ではなく、個別に隠れたところで、しかしながら確実に行われていました。



1926-1948

大正15年～昭和23年

1926 医師・看護師育成着手

1928 福江に助産院開院

1936 慈恵院診療所開設

1948 現在地に聖マリア診療所開設



聖マリア診療所開設



1969年昭和天皇・皇后
慈恵院行幸啓



養育事業は時代とともに充実し、必要な設備は整えられるようになりましたが、病弱、栄養失調の子どもは依然として多く、対岸の檜の浦の病院まで、てんま船で、毎日のように通院していました。通院には、子どもを抱く者、櫓をこぐ者など3、4人が付き添い、一日がかりのことでした。

栄養障害、栄養失調、虚弱児、死亡児のために何らかの対策を講じる必要を強く感じた施設長の木ロマツは、健康管理と養育の専門家が必要であると提案し、医師と看護師の育成に着手しました。1926年、濱崎タカを医師育成のため派遣し、その学費を賄うために、1928年 福江に助産院を開院、ペルー神父の遺産で精米所も開業しました。





医師・看護師養成着手～慈恵院診療所開設



こうして、濱崎タカは医師として10年後、慈恵院の子どもたちの元に戻り、医師指導により、収容児の栄養障害、健康管理は徐々に改善されていきました。

1943年には二人目の医師濱崎ミサヲが誕生し、医療活動は活発になり、会員たちは看護師、助手として事業に参加。より充実した医療事業が行えるように、医師、薬剤師、看護師、各種技師、事務、管理者の養成を始めていきました。

そして交通の便がよい福江町松山に、1948年、聖マリア診療所を開設しました。



1955-1975

昭和30年～昭和50年

1955 聖マリア病院開設

1956 結核病棟を併設

長崎各地の救済活動に協力した
共同体が統合し『聖婢姉妹会』
となる

1957 生活保護法医療機関指定

1958 無料低額診療施設受理

1967 鉄筋コンクリート3階建て新築

1974 結核病棟閉鎖

1975 聖婢姉妹会から正式修道会
『お告げのマリア修道会』となる

聖マリア診療所は徐々にベッド数を増し、1955年5月27日、ついに32床の病院として認可されました。時は車社会に移行しつつあり、子どもたちが病院に赴くのが容易になった頃のこと、これを機に奥浦診療所を閉じました。

病院開設間もない1956年、時の要求に応じて結核病棟が併設されましたが、1973年には新薬や治療法が進歩したため結核病棟を閉じ、一般病棟99床へ転換しました。建物も増築を重ね、1967年には鉄筋コンクリート3階建てを新築しました。



1948年 聖マリア診療所



1955年頃診察風景



1966年頃病室風景



1960年頃 聖マリア病院



1967年 鉄筋コンクリート3階へ新築

お告げのマリア修道会

本部修道院(長崎市小江原)





病院開設～修道会創立

【病棟体制の推移】

年	名称	病床数	内 訳
1936	慈恵院診療所		
1948	聖マリア診療所	10	
1955	聖マリア病院	32	
1956		35	一般病棟18/結核病棟17
1958		61	一般病棟31/結核病棟30
1959		65	一般病棟31/結核病棟34
1960		70	一般病棟36/結核病棟34
1963		102	一般病棟63/結核病棟36/伝染病隔離3
1964		99	伝染病棟廃止
1973			結核病棟廃止 一般99床へ
1994			54床を療養型病床へ
2000			療養型を介護型病棟へ
2003			一般病棟45/療養病棟54
2008			一般病棟45/医療病棟54
2019			一般を地域包括ケアへ

1962年の福江大火により、公立五島病院に併設された伝染病舎の焼失にあたり、これが再建されるまで伝染病隔離病棟が新設されました。



五島の過疎化が進むにつれ高齢者の入院が増加、さらに退院が決まっても世話をしてくれる人がいないというケースが増え、その打開策として1972年、隣接地に特別養護老人ホーム「聖マリアの園」が開設されました。



無料低額診療事業

1958年3月6日に受理された無料低額診療事業は、生活困難者が、経済的な理由によって必要な医療を受ける機会を制限されることのないよう、無料又は低額な料金で診療を行う事業です。



制服のうつりかわり



1950年代



2000年代



2010年～

1994-2007

平成6年～平成19年

1994 54床を療養型病床に転換

1995 訪問診療看護開始

2000 現病院新築落成

居宅介護支援事業所開設

2005 雪の聖母会聖マリア病院の臨床研修協力施設として研修医受入開始

2007 電子カルテ導入

前病院の風景



昭和53年受洗の様子



1994年、リハビリに励んで家庭に戻ったり、受け皿となる施設をさがしたりすることができるよう、54床を療養型病床に転換しました。



1995年には、在宅の方を支援するため、訪問診療、訪問看護が開始されました。



1



介護療養型病棟の風景



2



3

1. 聖マリア保育園児が運動会に来てくれました

2. 羽子板で負けてしまいほっぺに墨がつく中尾先生

3. 患者様家族と一緒に綱引き



現病院落成～創立60周年

現病院新築落成

2000年7月20日に当時の長崎大司教区長、島本要大司教様を初め、島内外の医療従事者、建設関係者、その他関係者、総勢75名が参加され、テープカットから始まり、落成式、祝賀会と盛大にお祝いをしました。



居宅介護支援事業所開設

1999年10月1日に指定通知書を受け、2000年に開設されました。当初はケアマネージャー4人体制でスタートし、2014年まで地域の皆様に対して必要な介護サービスを提供していきました。



臨床研修医の受入開始

地域医療を学ぶため、雪の聖母会聖マリア病院の協力機関として、2005年より研修医の受け入れを開始しました。当初の受け入れは年間5名のみでしたが、徐々に人数も増えていき、多い年で、9名の研修医を受け入れています。これまでに104名の受け入れを行い、指導にあたりました。



電子カルテの導入

2007年8月に電子カルテを導入。初めは操作に戸惑いもあり業務がスムーズに行かない事もあったのですが、導入することにより、他の部署との共有を図ることができ、患者様にとってより良い診療体制が整えられました。



2008-2023

平成20年～令和5年

2008 病院開設60周年

介護型療養を医療型療養病床に
転換

病院通信【マリアの風】発行開始



【マリアの風】第一号

病院開設60年の節目に、公
的情報、院内のトピックスを
中心に、患者様、ご家族及び
職員への情報提供紙として、
聖マリア病院通信「マリアの
風」の発行を開始しました。

2009 病院開設60周年記念
クラシックコンサート

開設60周年記念コンサート
教会に響く感謝と賛美の調べ

音楽監督 大石 潤

出演者 テノール 柿迫 秀
ソプラノ 西尾 舞衣子
ピアノ 鵜飼 節子



曲名

ブッチーニ 歌劇「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」
ドニゼッティ 歌劇「愛の媚薬」より「人知れぬ涙」 他

2011 東日本大震災支援

2019 ワールドユースデーパナマ大会
医療班参加

一般病棟を地域包括ケア病棟に
転換

地域連携室開設

《教皇ミサin長崎》の
救護班ボランティア

2021 新型コロナウイルスクラスター
発生の医療機関への看護師の派遣

2022 オンライン資格確認運用
マイナンバーカード利用可能

東日本大震災支援

震災から約1ヵ月後の4月14日、久留米の聖マ
リア病院の医療チームに加わり、医師1名、看護師1
名が派遣されました。陸前高田市仮設診療所、竹駒
地区の仮診療所での医療活動を行いました。



第2次派遣は、ちょうど復活祭
と重なり、励ましのメッセージを
添えたお祝いの手作りクッキーを、
全職員で協力して準備しました。
ダンボール4箱分がカトリック教
会などを通して避難生活をしてい
る方々におくられました。





60周年記念コンサート～現在

WYDパナマ大会に医療班として参加

聖マリア病院から医師1名、看護師1名参加しました。2週間で60件弱の事例に対応、日本巡礼団ばかりでなく、たまたま居合わせた外国籍の急患への対応もありました。



教皇ミサin長崎

救護班ボランティア参加

聖マリア病院からは医師、看護師他総勢23名が参加しました。救護班は、医師1名、看護師3名、他2名の6人1チームで構成され、救護に当たりました。



一般病棟を地域包括ケア病棟に転換

地域医療構想・人口減少に伴い、当院の機能について急性期から回復期へと転換する事を2016年から検討が始まり、2019年4月地域一般から地域包括ケア病棟へと転換しました。転換の際は、聖フランシスコ病院を見学させて頂き、大変お世話になりました。



地域連携室開設

地域包括ケア病棟へ転換する際に地域連携室の設置が必須項目でした。今まで入退院の調整を看護部長・病棟看護師が行っていた業務を全て地域連携室が担い、外部との連絡調整がスムーズになり早期退院を目指すことができました。

新型コロナウイルス対応



長崎県新型コロナウイルス感染症対策調整本部より、クラスターが発生している医療機関への派遣要請を受け、2名の看護師が派遣されました。



オンライン診療開始



マイナンバーカード利用開始



慈恵院跡地めぐりに行ってきました



令和5年4月15日、記念誌委員会で、聖マリア病院の起源となった、奥浦慈恵院跡地5か所をめぐりました。あいにくの小雨日和でしたが、陽が少しでも照ると皆が喜びの声をあげる微笑ましい光景も。

最初に、5人の子どもを受け入れ奥浦慈恵院の始まりとなった大泊（図A-1）へ。声をかけ合いながら滑りやすい山道を登りました。次に堂崎（図A-2）の跡地で、慈恵院で使用していた井戸、堂崎天主堂キリシタン資料館を見学。コーヒーとマドレーヌでの休憩が長引いてしまい、つづく赤瀬、その高台（図A-3・4）は車内から見るだけに…。そのあと、現在の慈恵院（図A-5）に到着し慈恵院の院長先生のお話を伺いました。

先人たちの気づく目、行動力、継続する心に触れることができました。また、奉仕は子どもたちから始まりましたが、今では聖マリアの園の高齢者まで、必然的に人間の一生をお世話することになったことに驚いた貴重な時間でした。

機会がありましたら皆様も是非巡ってみてください！



図 A
奥浦慈恵院跡



- ㊦ 大泊子部屋
- ㊧ 大泊子部屋跡地
- ㊨ 堂崎天主堂
- ㊩ 堂崎から檜の浦を望む
- ㊪ 慈恵院にてお話を聞く



元看護職員 富上ミツノさんに聞く ～聖マリア病院での思い出～



聖マリア病院に勤めるまで

私の叔母2人が奥浦慈恵院の修道院に入っていたので、修道院には子どもの時からよく出入りしていました。成長し、遠戚が婦長をしていた縁で、長崎大学病院で見習い看護婦として働いていましたが、そこで被爆。1年くらい入院治療を受けて、五島に帰ってきました。

最初は給食事務として

数年後、初代院長濱崎タカ先生から、給食事務を手伝ってくれないかと誘われました。ちょうど完全給食実施の申請を行おうとしていたときで、仕事の合間に、保健所での勉強に通わせてもらいました。完全給食実施が承認され、最初に食事を提供したのは7人でした。

連れ戻されて再就職

大学病院時代の同僚から原爆病院に来ないかと誘われ、院長先生に相談して暇をもらいました。その時、他の病院から、原爆病院に行くまでの1週間でもいいから手伝ってほしいと頼まれ、そのまま



看護職員当時の富上さん

4年余り。看護婦の仕事、請求、注文、事務の仕事、と忙しく働いていた時、叔母シスターが院長先生の遣いで、私を連れ戻しに来ました。

点滴セット導入のきっかけ

看護婦として勤めだした頃、マリア病院にはまだ点滴がありませんでした。脱水症状の患者さんが来ると、指の長さほどの針を大腿部に刺して、上から温かいタオルをかぶせて吸収させていました。院長先生に、「点滴セットがあればもっと楽にできるのに」と伝えると、「すぐ注文して」とお願いされ、使い始めました。

必要とされればいつでも

往診にもよく行きました。時間外が多かったですが、世話好きな方なので、必要とされるならむしろ喜んで行きました。患者さんの付き添いで長崎に行った日に、私の母が亡くなりました。「ごめんね、死に目に会わせられなかった」と謝る先生に、「仕事だったんだからいいですよ」と言いました。

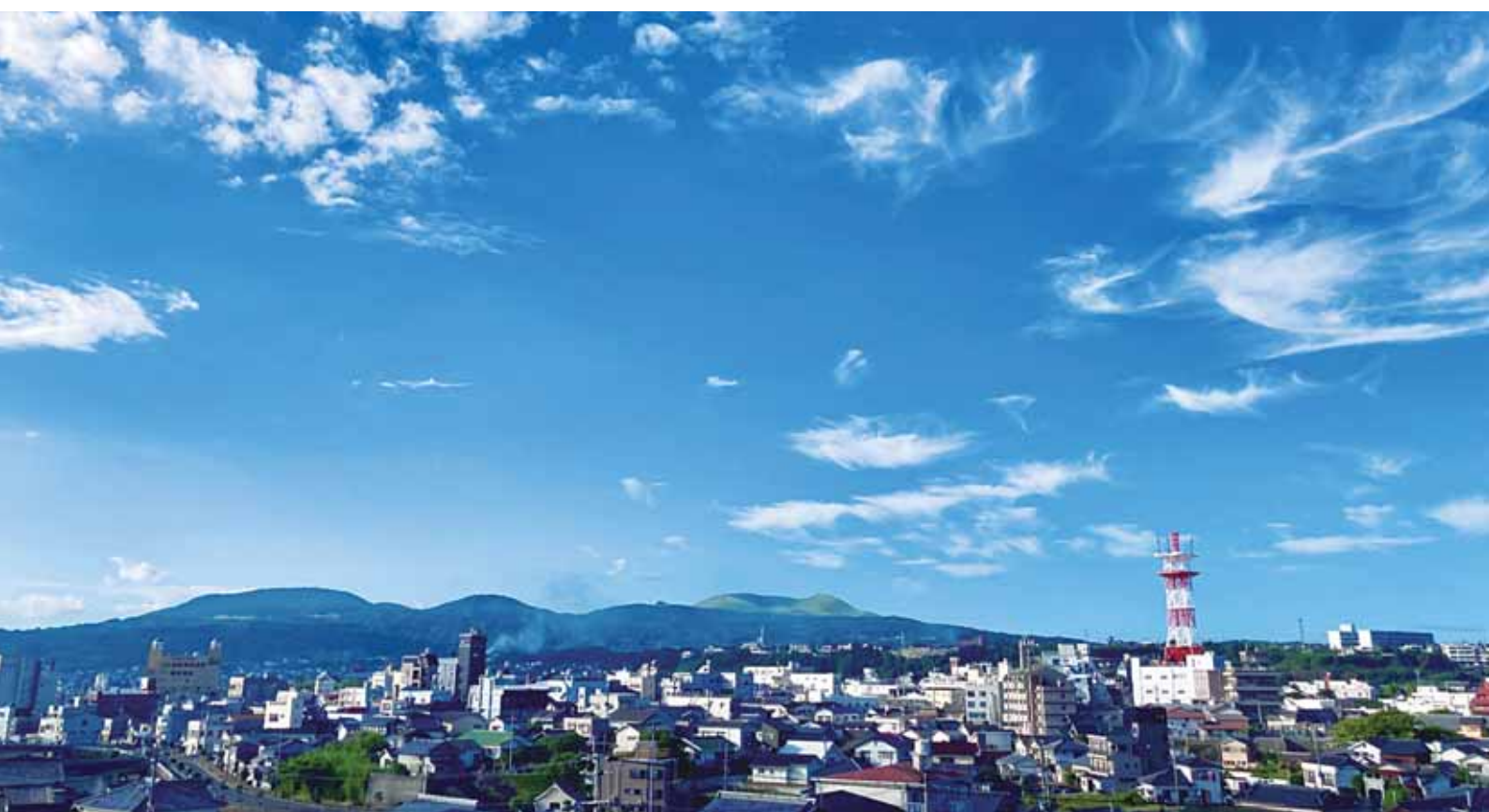


患者様の結婚式の証人をお願いされたことも

最後に

給食事務として入ってから数えると34、5年、最後は薬局でお世話になりました。聖マリア病院は我が家のように。今からもお世話になると思います。おそらくここから旅立つでしょう。どうぞよろしく申し上げます。

聖マリア病院と私



聖マリア病院と私



マリア病院 初の座談会 開催!!

75周年記念誌企画として、座談会を開催しました。マリア病院のスタッフが普段どんな事を思い仕事しているのかスタッフ同士でも改めて話をする機会がない中で、今回の座談会のインタビュー記事を通して垣間見ることが出来るのではないのでしょうか。このインタビューを読んだ方がマリア病院やスタッフとの関わりの中でコミュニケーションを取るきっかけになれば嬉しいです。

そして!!!!座談会当日は、中尾先生の54回目のお誕生日という事で、Happy Birthday~♪の歌をみんなで歌い座談会スタートです。お祝いのケーキはMCを務めてくれたSr.山本の手作りです。美味しかったです。

編集者より



聖マリア病院と私



濱口 幸隆

所属：療養病棟/介護員
勤続年数：20年
入職したきっかけ：
転職を機にUターン。自分だったら介護かなと思ったのと、前職の社長からもこれからは建築よりも、もっと人の役に立てる仕事がいいと背中を押してもらい入職。



佐々野 美和

所属：薬局
勤続年数：20年
入職したきっかけ：
高校卒業後、薬局のシスターと一緒に働かないかと声を掛けてもらい薬剤の知識はなかったが私で何か役に立てればと思い入職。

気負い過ぎず自然体で、
やれることから一歩ずつ

Q. 病院理念に対して行っている事は？

A. 特別に何かをしているっていうより自分ができる事を選び好みしないで、何でもしようと思って仕事をしています。そしたら最終的に理念の内容に近づいてくのかなっていう感覚があります。

Q. 印象に残っている事は？

A. 入社して2回ギックリ腰になって、その内の1回が入院患者さんをベッドから車イスに降ろしている時にやってしまって、「兄ちゃん大丈夫かな？私が重かったかな？」と気を遣わせてしまった事は忘れられないです。

Q. 地域密着型の病院だなと感じた事は？

A. これは院外での話で、おそらく過去に入院した患者さんで「お世話になりました。マリア病院だけがこんな事やってくれてうれしかった」って、自分の記憶にない方ですけど、そういった方に最近よく出会う事があって、仕事としてやってる無意識な行動に感謝の言葉を言われた時ですね。

Q. マリア病院に一言

A. 病院なので患者さんを第一にしつつ、やっぱり働いてる職員を大事にする病院であってほしい。

選ばれる時代だからこそ、心を込めて

Q. マリア病院ってどんな病院？

A. 外来の患者さんとスタッフが近いなと思います。よく話をする姿を見かけますし、診察を受けに来るより話をしたくて来ているのかなっていう患者さんも結構います。薬局窓口でよくお話をしていく方がいますが、その話は診察の時に先生にも言ったらどうかな？って思うことも多いですね。スタッフだけでなく、患者さん同士で顔なじみになって盛り上がっていたりしますね。

Q. どんな事を意識して仕事をしていますか？

A. 私は薬剤助手で直接患者さんと関わることもしないので、どちらかというとな薬剤師の役に立つ事、薬剤師が今何をしてほしいのか、何を求めているのか、察知して動いています。

Q. マリア病院に一言

A. 自分の親族や友人、関わりのある人達が、何かあった時はマリア病院に行きたいって進んで行ってくれるような病院であってほしいなと思います。



聖マリア病院と私



村井 初美

所属：給食
勤続年数：11年
入職したきっかけ：
高校卒業後島外へ就職したが、Uターン。仕事を探した時、タイミング良く友人から紹介を受けて入職。



杉本 扶美

所属：療養病棟/看護師
勤続年数：28年
入職したきっかけ：
地元での就職を考えていて県外の看護学校卒業後、帰島。親戚が通院していて、ここ良いよとおススメされ入職。

自分の仕事を持つ意義を忘れてはいけない

Q. 成長しているなと感じるところは？

A. 入院食はみんな同じ食事だと思っていたんですけど、切り方や火の通り、硬さも病気ごとに違うので何種類も作って見た目は少し悪くなっていますが、患者さんが食べやすいようにっていつも考えています。

そして、急に入院になって食事を用意するとか、こぼしたとか、そういったイレギュラー対応には強くなりました。

Q. マリア病院にしかないものは？

A. 父が亡くなった時に、マリア病院で看取って頂いて親族が付き添ってくれたんですけど、その時にシスター達がお祈りと讃美歌を歌ってくれて嬉しいし、すごく感動したと言っていました。他では見ない特別な事ですね。

Q. マリア病院に一言

A. マリア病院に入院した事があって、その時にスタッフの皆さんがケアの面でも食事の面でも、本当に良くしてくださって、とても癒されました。普段から当たり前のように気配りされているんだなと感じて、そういうのを続けてしていけたらいいのかなって思ってます。

些細な出来事こそ、大切に

Q. ベテランとして今の自分の役割は？

A. この記念誌の話を頂いてから、昔の記憶が蘇ってきて自分が今まで働いてこられたのは、これまで出会った全ての方のおかげだなと思っています。今年から教育係を担当するので、個々の強みを引き出しながら、新人の看護師たちに自分がしてもらったことや親切に教えてもらった事を、そのまま伝えていきたいなって、ものすごく感じます。

Q. イライラした時の解消法は？

A. 病棟では夜8時の放送（祈り）が流れるんです。夜勤の時、ちょっとイライラしている時や気持ちが乱れている時に放送が流れると、すごく落ち着きますね。

介護員の濱口さんや山口さんの声が心穏やかにしてくれて、気持ちを切り替えて仕事に戻る事が出来ています。



聖マリア病院と私



中尾 実紀子

所属：医局
勤続年数：26年
入職したきっかけ：
学生の頃から行き来しながら、お手伝いなどしており、他の病院で研修をしていたがここ以外に勤めるという選択肢はなかった。



山本 ふみり

所属：療養病棟/看護師
勤続年数：24年
入職したきっかけ：
その時に応じて困っている人の役に立ちたいと思い、看護師を目指す。その後、中尾先生と同様、他の病院へ勤める選択肢がなかった。

自分の価値を見出し、言葉にして伝える

Q. 凄いなと思った出来事は？

A. 夜勤中の看護師がね、ゴボツとかブヒツとか聞こえるとすぐ「誰の痰だ！」って言って、ちゃんとその患者さんの所に吸引しに走って行くんですよ。ガチャっていう音だけでもパって走って行って。それ見て凄いなって感心しました。

Q. マリア病院スタッフに伝えたい事とは？

A. 久しぶりに【礎】を読んだんですよ。礎っていうのは、うちの修道会のおこりを全部まとめたもので、当時の医師やシスターたちがどんな働きをしていたかっていうのが記録されているものです。私が入職した頃は先輩医師達がいっぱいて、ある程度時間に余裕がある状態で、でもだんだん医療の制度も変わって、忙しくてもう本当に何って感じで今、働いているんですけど、その頃はシスターでもない姉さんたちはいつ起こされてもいいようにモンペを着たまま寝て、昼夜問わず危険な所にも、道なき道を行ったり、今より過酷な環境だったようで、先輩達のその後を行っているんだという自覚を持ちなさいと言われたような感じがしました。

私達が今、苦勞している事も、もしかしたら誰かの将来の為に役に立っているって思えばいいのかもなと思ったりもしていますね。

さいごに…75周年を節目に今、見て・聞いて・話すことで、職員が仲良く、協力して仕事することを本当に大事にしてほしいと思います。

「MCって何？」そこからでした。

雰囲気作りに当院、5階にあるレースカーテン付きの職員食堂で、テーブルとアクリル板を準備し、手作りケーキで中尾先生の誕生日を祝う事から始めてみました。

当院に入職したきっかけから始まって、今に至るまでの個人的な歩みを振り返ってもらいながら本音を引き出せればと思っていましたが、それは少し無理がありました。準備不足もあったことを痛感しますが、もうその時は遅すぎました。

その人にとってマリア病院とはいったい何なのか？
どんな気持ちで協働して下さっているのか？

色々な思い出も交えながら聞きたい事は、たくさんあったのに、上手に聞き出せず、MCの難しさを痛感しましたが、集まって下さった皆様のお陰で、助けて貰いながら何とか終了。。

職種こそ違いますが、自分の出来る事で何か役に立てるならと、仕事に対する素直な気持ちと、マリア病院を大切に思っ下さる心を感じました。

最後は「楽しかったです。」「またしたいね。」と笑顔を頂きホッとしています。

何かをきっかけに自分の人生を振り返ってみる事は、成長の糧になると思いました。

また、今、自分の置かれている立場で何が出来るかをもう一度確認するいいチャンスだったと信じます。これからも宜しくお願いします。

部署紹介



医局



それぞれの専門分野を活かして、
外来・入院・訪問診療・施設の嘱託医
など、地域医療の為に頑張っています。

患者様の症状から病名を推測するには、幅広い知識が求められ、基礎的な知識は得ているものの、現場では様々な能力が必要です。

患者様から具体的な症状を聞き出すコミュニケーション能力や、複数の症状から可能性の高い病気を導き出す推察力、緊急時や多くの関係者と調整していく柔軟な対応力など、求められるスキルは多岐にわたります。

医局

医局長 中尾 実紀子

薬局



薬局

薬局長 下山 香

地域の皆様の為に、他の部署との連携を大切にし、笑顔で、安心、安全な医療を提供するよう努めます。

薬局の仕事は、処方箋に基づく調剤、服薬指導、医薬品情報の収集と提供、医薬品の管理など多岐に渡りますが、患者様一人ひとりの要望に耳を傾け、他の部署との連携を大切にしながら、患者様に信頼される質の高いチーム医療を目指しています。



放射線



放射線

浜辺 弘子

患者様、一人ひとりに合った丁寧な対応と被ばく低減に努め安心、安全な検査を心掛けています。

患者様の負担を軽減する工夫をしながら、より良い検査で診療に役立てられるよう努力しています。特に、患者様の被ばくに注意し、できるだけ低い線量でより良い画像を提供できるように技術の向上に取り組んでいます。



検査



検査

濱崎 直樹

表舞台に出らずとも、患者様の為に日々検査技術の向上に努めます。



患者様が臨床検査技師に直接お目にかかるまた、お話する機会は多くないかもしれません。実際どのような仕事をしているのか知らない方も多いと思います。検査室では正確なデータを迅速に臨床に報告し、診断や治療方針の決定に役立てる事を目標に日々、検査技術の向上に努めています。また、検査で得られたデータは、病気の早期発見・診断・治療・経過観察などの診療支援及び、病気の予防に役立てられます。

地域連携



地域連携

主監 古木 純子

寄り添う心をもって、患者様やご家族の相談へ対応し、他の病院・施設との調整を行っています。

地域連携室では笑顔を絶やさず、患者様・ご家族・職員など、どなたでも気軽に訪ねられるような環境づくりに努め、皆様とのコミュニケーションを大切にしていきたいと思っております。また、できる限り、皆様に安心できるような支援を心掛けるよう努めてまいります。

看護師・医療ソーシャルワーカーが対応させていただきますので、お気軽にご相談ください。



リハビリテーション



患者様と社会との接点になるよう、学びに対する向上心・コミュニケーション・患者様を思いやる気持ちを大事にします。

「リ=再び、ハビリテーション=適応すること」
病気やケガで生じた障害をできるだけ少なくして、残された能力を最大限に活用して社会復帰することを意味します。「病気を治す」というより「障害を克服する」と言った方がいいかもしれません。障害の程度、障害の部位など人それぞれです。その為、当院では理学療法士（PT）と作業療法士（OT）がそれぞれマンツーマンのリハビリを行い残された機能を最大限発揮できるようサポートしていきます。また、急性期・回復期・生活期に対応しています。



リハビリテーション

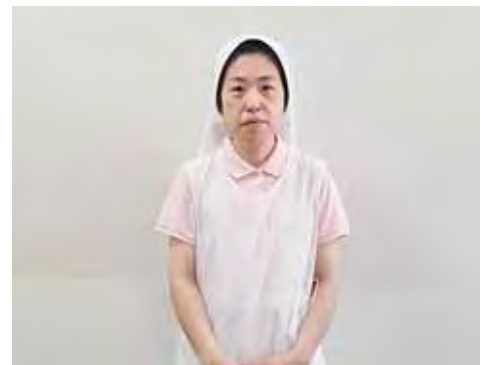
室長 中尾 菊代

給食



治療の一環としての役割を果たすだけでなく、患者様にとって身近な食事であるよう、一つ一つの料理を真心こめて、提供しています。

給食部門では管理栄養士・栄養士・調理員・事務員により、入院・外来患者様への栄養指導や病態に合わせた食事の提供、四季を感じられるようなイベントメニューを取り入れるなどの工夫を行いながら食事を通して患者様の栄養面でのサポートを行います。そして患者様へ安心・安全な食事作りを目指します。



給食

室長 松崎 由美子

外来



外来

師長 洗川 久美子

他職種との協働を進める為、連携を密にして、安全で質の高い看護を提供できるように努めます。

外来看護師は主に主治医の診療補助を行っていきます。問診・検温・採血・事務作業など幅広い業務を行っております。仕事量が多く、同時進行でさまざまな業務を処理しています。また、多くの患者さんと接する機会が多いため、待ち時間の長い患者さんへの細やかな気配りなど高いコミュニケーション能力が求められています。その為にも適切な対応、思いやりのある行動を心掛けていきたいと思っています。

療養病棟



療養病棟

師長 井手 潤 ちあき

キリスト的愛を持って、治療後の療養、終末期を迎えた方々に必要な看護を行っています。

主に慢性期の疾患で長期に渡り療養を必要とする方々に、医療と介護を提供する病棟です。

特に高齢者の病気は長引くことが多く、長期的な医療と共に、身体機能の低下を予防するための手厚い看護・介護が大切になってきます。身体の運動機能の維持や改善のためのリハビリテーションを行い、自宅や施設などに帰られるまでに必要な医療と介護を行います。

地域包括ケア病棟



地域包括ケア病棟

師長 松永 晴美

細かい気配り・コミュニケーションを大切にし、思いやりを持って看護を提供していきます。

急性期治療の為の入院に加え、他院での急性期治療を終えた患者様の入院受け入れを行い、早期の在宅・施設復帰に向けた医療管理・看護・リハビリテーションを行うことを目的としています。

また、病院と介護施設・在宅との橋渡しをする役割を担っています。

システム



システム

入口 裕光



病院業務に支障が無いようにパソコンを含む関連機器の動作チェックを行っています。

電子カルテシステムをはじめとする、診療情報システムからイントラネット、インターネットなど院内で使用するパソコン・プリンター全般を管理しています。システムの不調は診療においても、患者様サービスにおいても多大な影響を与え、たちまち混乱を招くことになります。トラブルが起きない為、また起きても最小限に抑える技術が必要となってきます。



総務(ハウスキーパー・営繕)



ハウスキーパー

主任 山下 京美

快適に病院をご利用いただけるよう、安心・安全で衛生的な生活環境を提供します。

ハウスキーパー：当院へ来られた患者様が、快適な気持ちで療養できるよう、また、スタッフも安全に業務ができるような環境づくりに努めております。

営繕：各種機器の修理、部品交換、不調時の原因調査等、院内ライフラインの管理を行っております。



医事



患者様をはじめ、病院に出入りする多くの方と接する「病院の顔」だという心構えで業務に臨みます。

医事は、受付・会計を主として行う接客業務とレセプト作成や保険請求を行う事務処理業務に分けられ、患者様が来院されてから帰られるまで関わりを持つ部署です。

一日に100人以上来院され、その一人ひとりに寄り添いながら、話しやすい雰囲気作りや受付から会計までの待機時間が短縮できるよう心がけています。



総務

事務長 田崎 幸一

委員会紹介



感染対策委員会



委員長：中尾実紀子

委員：山中淳子・森久仁子・洗川久美子・松永晴美・井手渚ちあき・久志貞恵・濱崎直樹・
籠甲屋亮子・熊川いせ子・豆谷弘恵・山口義生・田島和則・吉原美根子・平山和幸・
清水久幸・リハビリスタッフ（出向）

医療安全管理委員会 医療ガス安全管理委員会



委員長：森久仁子

委員：山中淳子・洗川久美子・松永晴美・井手渚ちあき・下山香・浜辺弘子・弥永拓哉・
古木純子・松崎由美子・中野真由美・岩下忠文・山下京美・豆谷弘恵・谷元誠博

院内教育委員会



委員長：森久仁子

委員：洗川久美子・松永晴美・井手澗ちあき
佐名登志子・杉本扶美・赤尾康寛
平田吉史

サステナブル委員会



委員長：熊本昇平

委員：山中淳子・田崎幸一・浜辺弘子
木戸和枝・里中小百合・岩下忠文
山口義生

褥瘡対策委員会



委員長：磯邊清美

委員：松永マサ子・森久仁子・松永晴美
井手澗ちあき・馬場華清・赤窄純治
宇戸愛子・久志貞恵・松崎由美子
中尾菊代・沼田百合枝

身体拘束廃止委員会



委員長：平田美江子

委員：深堀実・森久仁子・松永晴美
井手澗ちあき・内海晴美・横枕秀憲
赤窄美穂・平山亜希子

接遇委員会



委員長：山田悦子

委員：山下義文・森久仁子・浜辺弘子
樽角弘子・里中小百合・中尾裕治
上野光英・村井初美・佐々野美和
眞倉恵

診療情報管理委員会



委員長：入口裕光

委員：山下義文・中尾露子

薬事委員会



委員長：下山香

委員：山中淳子・中尾実紀子・久志貞恵
葛岡香・野原信子・入口アヤ子

輸血療法委員会



委員長：濱崎直樹

委員：山中淳子・中尾実紀子・久志貞恵
下山香・梅木伊代美・田口紀美恵
馬津川明雄

防災対策委員会 (BCP)



委員長：浜辺弘子

委員：山下義文・岩下忠文・平山和幸
入口裕光

環境整備委員会



委員長：中村陽菜

委員：森久仁子・佐名有香梨・平本茜
京直美・山崎裕子・磯野サオリ
川端梢・松坂真由

衛生管理委員会



委員長：戸村真理香

委員：山下義文・松永マサ子・古木純子

クリティカルパス委員会



委員長：佐名登志子

委員：中尾実紀子・杉本扶美・岩下めぐみ
田口紀美恵・野原信子・尾崎沙也加

地域に向けた取り組み





SDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標) とは、2030年までに「誰一人取り残さない (leave no one behind)」持続可能な社会の実現を目指す世界共通の目標です。

アジェンダは、17のゴール・169のターゲットから構成されています。

SDGsは途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、聖マリア病院は持続可能な開発目標に対し、以下の取り組みを行っております。

1. 医療提供について



低所得者や特殊事情により医療を受けにくいの方に対し、無料もしくは低額で医療行為を行います。

生活困窮者が、経済的な理由で必要な医療を制限されないことを目指していきます。

【具体的内容】

- ・ 無料低額診療事業
- ・ 自治体・福祉事業所との連携



2. 職場環境について



誰もが働きやすく、やりがいを持って仕事ができる職場環境を目指していきます。

【具体的内容】

- ・ 短時間勤務など職員にあった働き方の選択
- ・ 職員スキルアップ為、医療安全・感染対策などの勉強会を行う
- ・ 未経験者でも安心して働けるよう教育委員会を設け計画的な指導を行う



【学術発表会 3施設とオンライン】



【院内定期研修】

【クラスター対応研修】

3. 在宅復帰



障害者や病気を抱えている方が、住み慣れた環境で再び生活出来るように支援していきます。

【具体的内容】

- ・ 訪問診療
- ・ 地域連携室を設け自治体・福祉事業所との連携



【多職種カンファレンス】



【訪問診療】

4. 資源・環境保全



ゴミ問題・食品ロス・エネルギー問題など取り組むべき課題に対して、小さな活動を通して少しでも目標達成に近づくことが出来るよう努力していきます。

【具体的内容】

- ・ 包装紙等の再利用
- ・ こまめな節電・節水
- ・ 食品ロス削減・定期的な地域清掃



【地域清掃活動】



【食品ロス削減】



当院は、SDGsに取り組む県内企業等を「見える化」することにより、企業等のPRを行うとともに、他の県内企業等への取組を波及させることにより、県内企業等の経営強化と地域課題の解決による本県の地方創生につなげることを目的としている長崎県SDGs登録制度に令和5年2月24日登録を行いました。





院内行事



ロザリオの集い

カトリック教会では5月と10月にロザリオの祈りを通じて、聖母マリアの取り次ぎを願います。聖マリア病院でも世界の平和、病床にある人たちにいやしが与えられるように願ってカトリック信者の入院患者様とともに祈りを捧げています。



火災避難訓練

年に二回、5月と11月に実施しています。初期消火、通報、避難誘導の訓練を行い、消火栓と消火器の実技訓練を行っています。万が一火災が発生した時、患者様の命と安全を守れるように職員全員が真剣に取り組んでいます。



院内学術研究発表会

医療と看護の現場で取り組み、研究したことをこの発表会を通して共有し、医療と看護の質を高めることを目的としています。2022年は新型コロナウイルス感染症の予防のために、聖マリアの園、みみらくの里、緑乃園、聖マリア病院内各所を中継し、オンラインでの発表となりました。



病者の塗油

カトリック教会にはイエス・キリストが病人をいたわって癒したことに由来する「病者の塗油」という秘跡があります。入院患者様に司祭が病人の癒しのために聖なる油を塗り、御家族や職員と共に祈ります。患者様にとって聖体拝領と祝福は大きな喜びです。



地域清掃活動

SDGs 委員会が主体となって3、4ヶ月に一回行われています。聖マリア病院の職員だけでなく他の施設とも協力し清掃活動を行っています。継続的に活動を行うことで、住み続けられるまちづくりに貢献しています。



BLS・ACLS

一年に一度ケアワーカー対象のBLS、看護師対象のACLSの心配蘇生法講習会が行われます。心肺蘇生に必要な知識と技術を身につけるとともに、実技を繰り返し行うことで必要時に現場ですぐ対応できるチームワークを習得します。



追悼の集い

カトリック教会では11月を「死者の月」と定め、亡くなられた方を思い、特別に祈る月としています。聖マリア病院では、当院で亡くなられた患者様、また当院にゆかりのある故人のために、毎年11月にご家族の皆様とともに集い、祈りを捧げます。



クリスマス

待降節になるとクリスマスの飾りつけや院内放送が始まり、病院中がクリスマスの雰囲気になります。職員に向けて、シスターのチャリティー喫茶も開催され集まった募金はカリタスジャパンに送られます。クリスマス当日には「主の降誕」のミサが行われ、典礼には職員も参加し入院患者様や教会に行くことが難しい患者様も集まります。入院患者様には小さなカードとともにささやかなプレゼントが配られます。



復活祭

十字架にかけられ亡くなられたイエス・キリストが三日目に復活したことを記念するお祝いです。患者様はもちろん職員も事前に病室などでゆるしの秘跡を受けて病院でのミサに参加します。



バーベキュー

秋になると病院ルルド前の芝生で行われます。職員の家族も交えて、おいしいお肉、お魚、お酒にと職員持参の地元食材やシスターたちのごちそうをいただきます。職員全員参加なので他部署との交流の場になります。



忘年会

かつては余興を担ってきた「出たがりーず」というグループが存在していましたが解散されました。しかし今でも食べる暇がないほど出し物の準備に励む職員も。その年の苦勞を忘れ勞うために執り行われます。



コールアンジェラス


お告げのマリア修道会シスター有志のコーラスグループです。クリスマスコンサートをはじめ病院内外で患者様、家族、地域の皆様へ素敵な歌声を披露していただきます。





職員メッセージ





子供の頃から病気になれば通い、夜になればライトアップされているマリア像に安心を覚えました。地域の皆様にとっても同じ存在で病気を癒し、今後の生活を一緒に考える場になっていると思います。高齢化になりスタッフの確保も難しくなっている今、職員の健康と聖マリア病院の存続が続きますように。

戸村真理香

旧病院では、病室から浴室までの距離があり、設備も整っておらず、入浴介助はとても大変だったことを覚えています。今ではいつでも、入浴する事ができ、どのような患者様もOKで、ふれ合いも出来てありがたいです。

中野真由美

高齢化が進む中で、より一層、他の医療機関や施設との連携を深め、理念にもあるように地域の皆様の要望に応えながら、医療を目指していければと思います。

田端清一

縁あって入職して6年が過ぎました。健康で働かせて頂ける事に感謝して、地域の皆様が足を運びやすいような温かい場所となるように、微力ながら支えていきたいと思っています。

田尾智香子

私は介護職として初めて患者様に接する機会を頂けたことを感謝しております。これからも日々患者様に寄り添い、聖マリア病院が地域に愛され地域に必要とされる病院でありますよう一職員として精進してまいります。聖マリア病院の益々の発展をお祈りしてお祝いの言葉とさせていただきます。

山口義昭

私の入職は2002年11月でした。当時の病院は男性職員が5名とこじんまりで和を大事にし、ともに成長し続けた日々が懐かしく思えます。あれから20年、男性職員も30名となり、「一人一人が病院を支えている」という使命感をもって後輩に伝えていくと同時に「和をもって成長となす」を実行し、今後も理念に基づき奉仕の心を忘れず、地域の皆様の為に今後も努めていきたいと思っています。

岩下忠文

家族を「住み慣れたところで人生の最終を過ごさせてあげたい」そんな時、聖マリア病院にお世話になる事が出来たのは大変ありがたい事でした。これからも地域に寄り添った医療に出来るだけ協力していけたらと思います。

中尾露子

「患者様が優しい！」久留米聖マリア病院からの研修医が笑顔で語ってくれた。祖父母から孫まで、自分の家族のように医療の手を差し伸べてきたと思っただけ、実は皆様方の温かさに包まれた日々と気付かされた。今75年の節目を迎え、一層の感謝を込めて地域の皆様と共に歩みたい。

松永マサ子

私は働き出して日が浅いのですが、カトリックの愛の精神に基づき「自分を愛するように他人を愛しなさい」という教えに感銘いたしました。75周年という歴史ある病院で働けることを誇りに思います。

中野麻弥

私は聖マリア病院に入職して2年が経とうとしています。看護師として働くのはここが初めてで何も分からない状態で入職し不安だけでしたが、先輩看護師さんや他スタッフが優しく指導して下さいのおかげで、看護師として少しは成長できたと思います。

石谷真紀

地域の皆様の要望に応えながら75年間その時、その時代に合わせて医療・看護・介護を提供してきた聖マリア病院です。これからの未来も必要される医療が地域の皆様に届けられるよう努めてまいります。

井手漕ちあき

患者様や地域の皆様に寄り添った診療を続けながら、私たちの作った食事で、患者様に少しでも元気になってもらえるように、給食一同で頑張っていきたいと思います。

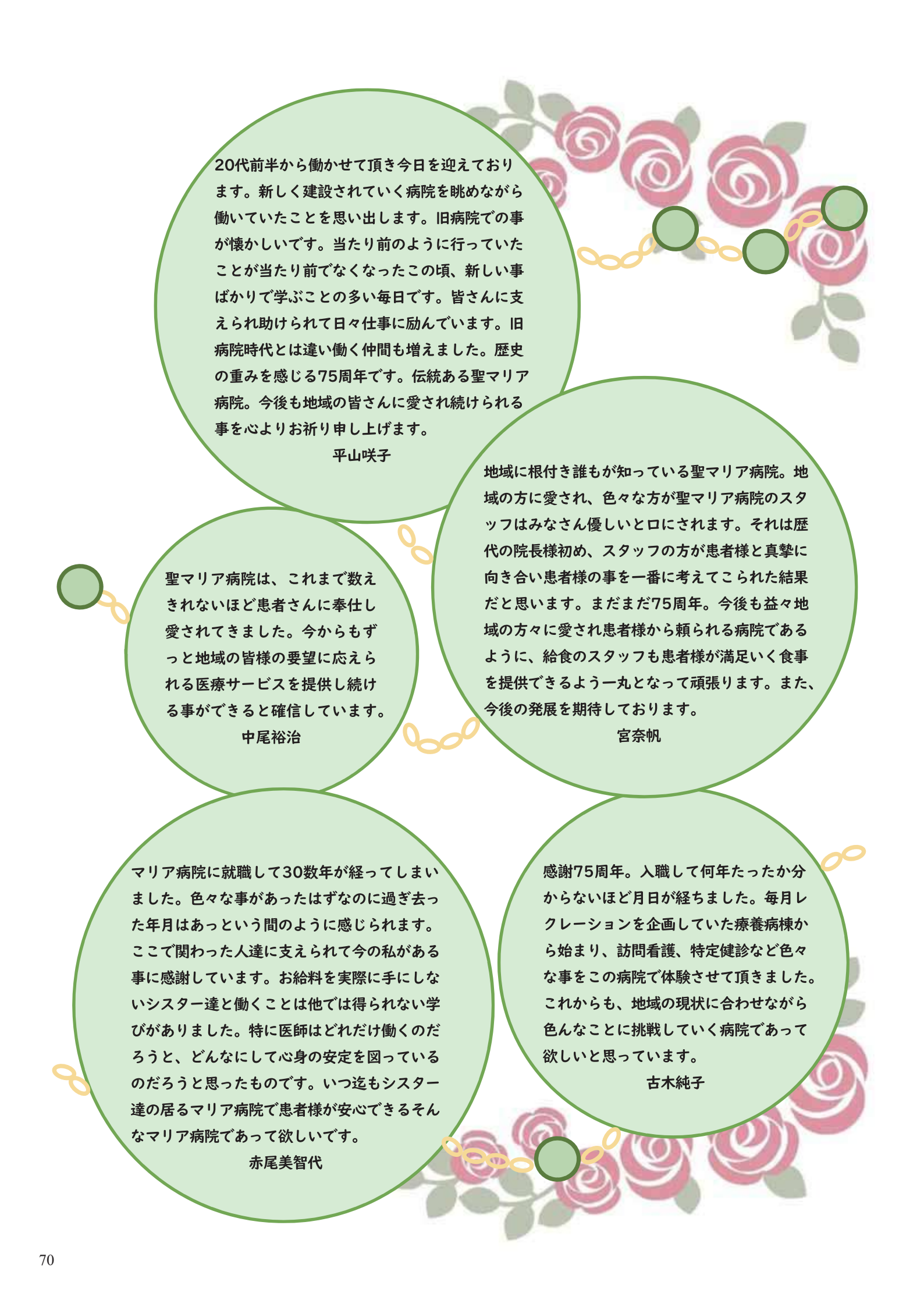
江頭裕子

「人に接したとき人間はこうあるべきという規範をもって人を裁き、善人と悪人とに振り分けていく。ファリサイ派の人の心には道徳的には立派であっても、人間として一番大切なものが欠けている。一人の人間の哀しみや孤独や痛みを自分の心の鏡に写してみる。ここからしか真の慈愛の行為は生まれてくることはない。」ある本の引用ですが心にズキンと刺さりました。私の常備薬となっています。

浦トミ子

マリア病院に入職して13年が経ちました。最初は何も分からない私を皆さんが丁寧に指導してくれた事を今でも感謝しています。これからのマリア病院の為、自分が経験してきたことを、他職の方々と協力しながら伝えていきたいと思っています。

三田淳一



20代前半から働かせて頂き今日を迎えております。新しく建設されていく病院を眺めながら働いていたことを思い出します。旧病院での事が懐かしいです。当たり前のように行っていたことが当たり前でなくなったこの頃、新しい事ばかりで学ぶことの多い毎日です。皆さんに支えられ助けられて日々仕事に励んでいます。旧病院時代とは違い働く仲間も増えました。歴史の重みを感じる75周年です。伝統ある聖マリア病院。今後も地域の皆さんに愛され続けられる事を心よりお祈り申し上げます。

平山咲子

聖マリア病院は、これまで数えきれないほど患者さんに奉仕し愛されてきました。今からもずっと地域の皆様の要望に応えられる医療サービスを提供し続ける事ができると確信しています。

中尾裕治

地域に根付き誰もが知っている聖マリア病院。地域の方に愛され、色々な方が聖マリア病院のスタッフはみなさん優しいと口にされます。それは歴代の院長様初め、スタッフの方が患者様と真摯に向き合い患者様の事を一番に考えてこられた結果だと思えます。まだまだ75周年。今後も益々地域の方々から愛され患者様から頼られる病院であるように、給食のスタッフも患者様が満足いく食事を提供できるよう一丸となって頑張ります。また、今後の発展を期待しております。

宮奈帆

マリア病院に就職して30数年が経ってしまいました。色々な事があつたはずなのに過ぎ去った年月はあつという間のように感じられます。ここで関わった人達に支えられて今の私がある事に感謝しています。お給料を実際に手にしないシスター達と働くことは他では得られない学びがありました。特に医師はどれだけ働くのだろうと、どんなにして心身の安定を図っているのだろうと思ったものです。いつ迄もシスター達の居るマリア病院で患者様が安心できるそんなマリア病院であって欲しいです。

赤尾美智代

感謝75周年。入職して何年たったか分からないほど月日が経ちました。毎月レクリエーションを企画していた療養病棟から始まり、訪問看護、特定健診など色々な事をこの病院で体験させて頂きました。これからも、地域の現状に合わせながら色々なことに挑戦していく病院であって欲しいと思っています。

古木純子

地域に根差した病院として住み慣れた場所で、安心して医療が受けられるよう、カトリックの愛の精神に基づき、患者、家族に寄り添い、見守り、支える聖マリア病院であり続けたいと願っています。

森久仁子

この12年間での聖マリア病院で勤めてきた学びや経験を活かし、更なるスキルアップで今後も患者様に寄り添い、丁寧な介護ができるように努めていきたいと思います。

中村陽菜

リハビリ職として、患者様一人一人のニーズに沿ってリハビリを提供する為に、日々自己研鑽に努め、多職種と連携し患者様を最良の結果に導けるよう努力していきます。

熊本昇平

『自分を愛するように他人を愛しなさい』の理念を基に少しでもお役に立てるよう、いつも笑顔を忘れず声掛けを大切にし、これからも頑張ります。

京直美

私がマリア病院に入職した時は、今の駐車場の場所に病院が建っていました。あれから新しく建て替わり、レントゲン室にはCTが入り人工呼吸器など医療機器も増えました。カルテも電子カルテになり覚えるのに必死だったことを思い出します。患者様の状態も以前に比べ重症化しケアをする側にも負担がかかるようになっています。忙しく大変な仕事ではありますが、働ける事に感謝し他のスタッフと協力しながら、これからも頑張ります。

梅木伊代美

子育てをしながら定年まで働けるのがマリア病院の強みです。周りのスタッフのサポートのおかげで、私も子育てをしながら6年目になりました。この環境に感謝しながら、患者様の心に寄り添い、私自身も成長し続けていきたいと思います。

入口アヤ子

若手職員が院長先生に聞いてみた



若手職員が院長先生に聞いてみた！



名前 山下 典繕

部署 地域包括病棟/看護師

入職 2年目

趣味 ソフトボール・ゴルフ
温泉・英会話



名前 横枕 秀憲

部署 リハビリ/OT

入職 5年目

趣味 スポーツ観戦



名前 藤原 明音

部署 給食/調理員

入職 3年目

趣味 料理



名前 梅本 雪乃

部署 地域包括病棟/看護師

入職 1年目

趣味 寝る事・ピアノ



名前 熊川 凜桜

部署 療養病棟/看護師

入職 1年目

趣味 携帯を触る事

積み重ねが大事

せっかく与えられた人生なので、達成感のある人生を送ってほしいです。自分が設定した目標に行くのも、1つの達成感だと思っています。

私は医者の仕事は私自身の実力よりも少し上だと感じていました。少し上ぐらいの所に具体的な目標を設定して毎日わずかな時間であっても繰り返し積み重ねることで自分が全く変わってくるので、頑張る時間を作って60歳になった時に自分はここまでやってきたって人に誇れるものを持つ自分になっているように、本当に頑張ってほしいなと思います。皆さんがマリア病院に来てくれて、本当に嬉しく思っています。ありがとうございます。



山中 淳子 院長

～経歴～

- ・1989.6月
医師免許取得
- ・1992.6月
聖マリア病院入職
- ・1993.2月
修道誓願宣立
- ・2017.4月
聖マリア病院院長就任



Q. 休日はどのように過ごしていますか？



A. 病院長になってからほとんど休んでいません。
郵便物とか、書類やメールの整理を休みの日はしています。
最近は歌の練習をしています。



Q. 検食で1番美味しかった料理は何ですか？



A. エビフライ。

好きなメニューが子供みたいですけど・・・病院のエビフライは美味しいんですよ。
エビがちゃんと入っているし衣もカラッと揚がっていてイイ感じです。
それとカレイの甘酢あんかけも好きです。

インタビュー



Q. 1週間、休みをもらえたら何をしますか？

A. 旅行したいですね。

1番行きたいのは岩永マキが流された鶴島や浦上4番崩れの時、キリシタンが流された流刑の地を1個1個訪ねて行きたい。ちなみにシスターになる前はディズニーランドに行ってスペースマウンテンに3回連続で乗りました。



Q. 1年目の時はどのように乗り越えてきましたか？

A. 1年目よく覚えてます。泣きながら病院に行っていました。

明日には「医者辞めてやる！」って1年目はずっとそう思っていました。自分が医者としての適性があるか真剣に悩んで、辞めた方がいいんじゃないかって・・・でも、取った資格を無駄にしない為に泣く泣く乗り越えました。あと、仲間からは助けられました。



Q. 最近、感動したり、泣いたことはありますか？

A. 最近あまり感情が動きませんが・・・

この間、「永井隆の十字架の道行」という本を読みました。永井隆先生が亡くなる直前に描いた絵の解説書です。久しぶりに“うるうる”しました。



Q. 愛とお金はどちらが大切ですか？

A. 愛！！

金はなくても幸せになれるけど、愛が無いと幸せにはなれないと思います。皆さん愛されたいと思う気持ちが多いかもしれないけど、喜びが多いのは愛することだと思うんです。だから、お金が無いから不幸だとか、そんな風に思わない。



インタビュー



Q. 趣味は何ですか？



A. 歌！歌は大好き！！

YouTube のカラオケで時々、アナと雪の女王のテーマソングとか練習したりしています。難しいんですよ。



Q. 1 番やりがいを感じる時はどんな時ですか？

A. 患者さんが治っていくときです。

順調に元気になっていく時は「ああ、良かったな」って思いますね。自分も頑張って良かったなと思います。



Q. 人生やり直すなら、どんな職業を選びますか？

A. 声優をしたい。それかお料理をする仕事をしたい。



Q. 逆に皆さんが別の仕事をするなら？

A. アパレル店員



A. 相撲取り（力士）



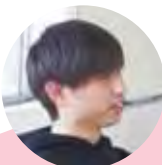
A. 保育士



A. 歌手



A. 野球選手



～さいごに～



Q. 今年59歳、そして来年60歳になる私ですが、皆さんが60歳になった時、どんな自分になっていきたいですか？

A. 特技の料理を続けていきたい。

料理を通して誰かの役に立てたり、喜びを与えられるような人になりたいです。



A. 家庭を持って子供もいたらいいなど。

看護師じゃなくても自分ももっと輝けそうな仕事があるなら迷わずに飛び込んでいきたいです！



A. 畑仕事をして、「自分で作って食べる。」

そんな暮らし方もいいのかなって思ってます。



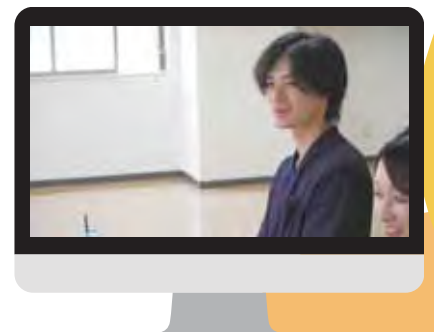
A. お花とか育てたい。

いつもすぐ枯らしちゃうのでコツをつかんで元気に育てられるようになっていきたいです。



A. 今のリハビリの仕事が続けたい。

正直、辞めても特にやりたい事がない。(笑)
就職活動も面倒くさいので働き続けます。あと健康でいきたいです。





今後の展望





変わらない 心の価値を大切に そして未来へ

聖マリア病院はこの五島の地で75年間、医療を行ってきました。これまでの歩みを振り返ると、その時代・状況の必要に迫られて、やむにやまれぬ思いで事業を展開してきたと言えます。しかしその歴史を通してみると、道筋が決められていたかのような流れを感じます。その流れは神様の導きだと私には感じられません。ではこれから私達には何が託されているのでしょうか。先人たちがそうであったように、今、私たちが・社会が・世界が直面している困難に真摯に向き合い、私達ができることを真剣に取り組んでいくことが使命だと感じます。

さて日本は少子高齢化、人口減少の課題に直面し、対応に追われています。特に五島市は日本の中でも高齢化が非常に進んでいます。高齢化により増える疾患の中に認知症とがんがあります。そして多死社会を迎えます。私達は現在すでにたくさんの認知症の患者様や終末期の患者様を診療しています。しかし、私達が提供しているケアはまだ不十分な点が多々あると感じています。今年7月から認知症ケアと緩和ケアの学習会を始めました。専門家はいませんが、知識を深め行き届いたケアができるように、全職員で取り組んで行きたいと思います。そして誰もが迎える終末期を、少しでも穏やかに、尊厳を持って過ごすことができる、そういう場を提供できることを目指していきたいです。

少子高齢化で問題になるのは人手不足です。技術進歩が凄まじいDX（デジタルトランスフォーメーション）が重要になるでしょう。医療の分野においてもすでに画像診断や病理診断の領域では人工知能の活用が試みられています。DXによって業務の正確さや効率化がもたらされ、介護においてはロボットなどで労力が軽減されると想像しますが、もしかすると想像以上の変化があるかもしれません。今後の人手不足を解決する重要な要素であり私達も積極的に利用していかなければならないと思います。一方でデジタル化の中でも、人としての優しさ、暖かさ、笑顔はやはり癒しには欠かせないものです。特にカトリック病院として、人の力を超えた神様の存在を受けとめる謙虚さを持ち、職員一人ひとりが心を大切にする現場であるよう、そのような空気を醸成していきたいです。

世界に目を向けると、そこにも深刻な問題がたくさんあります。気候変動で自然災害の規模は年々甚大になっていますし、温暖化の影響で地球環境の悪化も進んでいます。紛争や戦争は終わりが見えず、格差社会の中で貧困に苦しんでいる人もたくさんいます。このような問題を病院の中にいる私達も無関心ではできません。その中で大切な命が失われているからです。病院の中だけで、人々の健康を守ることはできません。もっと多角的な視点を持って医療に取り組む必要があると思います。当院ではサステナブル委員会を立ち上げ、小さな活動を行っていますが、命と結び合わせこの活動にはもっと力を入れて行きたいです。

健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health :SDH）が今取り上げられています。健康の決定要因は、遺伝子や生活習慣など生物学的要因だけではなく、経済状況や受けた教育、人とのつながりなどの社会的・経済的要因、また国の政策や、地球環境、戦争などの環境要因、多数の要因が関与しており、これらをまとめて「健康の社会的決定要因」と言われています。社会的格差が健康格差を生み出すためWHOも社会的格差をなくそうと呼びかけています。このような視点を持ち、患者様の社会的背景にも配慮して診療する必要があります。当院は無料低額診療も行っていますが、これからも継続していきたいですし、もっと内容を充実させることが必要かもしれません。

時代の変化がとても早いと感じます。どんなふうに世の中が変わっていくのか想像できません。でもどんなに時代が変わっても、医療者が大切にすることは変わりません。それは命、神様が確かな愛と目的をもって創造してくださった唯一無二の命。その命を尊び大切に、最後の一息まで大切に寄り添うことです。命の源は人が創り出すことはできず、私たちは与えられたものをただ受け取っているだけです。病院を創設した先輩たちは若い命のために自分の人生のすべてを捧げ尽くしました。その心の価値は決して変わることはありません。時代は変わっていきますし、働くメンバーも変わっていきます。変えるべきもの、変えてはならないものを見極め、これからもこの地で地域の方々に寄り添いながら、私達の使命を果たしていきたいです。

院長 山中 淳子



資料



病院概要

2023年4月1日現在

宗教法人お告げのマリア修道会 聖マリア病院

所在地 〒853-0052 長崎県五島市松山町133番地2
TEL 0959-72-5101 FAX 0959-74-1771
<https://g-maria.jp>

開設者 宗教法人お告げのマリア修道会

病床数 99床：地域包括ケア病棟45床 医療型療養病棟54床

施設概要 敷地面積6594.35㎡ 延床面積25535.51㎡
鉄筋コンクリート5階建

標榜科目 内科・小児科・呼吸器内科・消化器内科・リハビリテーション科

職員数	医師	5名	管理栄養士	1名
	看護師	41名	栄養士	1名
	介護員	26名	給食事務	1名
	薬剤師	2名	調理員	8名
	薬剤事務	2名	M S W	2名
	臨床検査士	1名	システム	1名
	放射線技師	1名	ハウスキーパー	3名
	理学療法士	2名	営繕	1名
	作業療法士	2名	事務員	9名

施設基準 地域包括ケア病棟入院料2 第73号
療養病棟入院基本料1 第13号
情報通信機器を用いた診療 第3号
機能強化加算 第341号
診療録管理体制加算2 第104号
療養環境 第76号
療養病棟療養環境加算1 第13号
後発医薬品使用体制加算1 第89号
データ提出加算 第89号
入退院支援加算1 第153号
認知症ケア加算3 第81号
がん性疼痛緩和指導管理料 第67号
がん治療連携指導料 第337号
薬剤管理指導料 第131号
別添1の「第14の2」の1の(2)に規定する在宅療養支援病院 第14号
在宅時医学総合管理料及び施設入居時等医学総合管理料 第458号
CT撮影及びMRI撮影 第319号
脳血管疾患等リハビリテーション料(Ⅱ) 第195号
運動器リハビリテーション料(Ⅱ) 第180号
呼吸器リハビリテーション料(Ⅰ) 第79号
ペースメーカー移植術及びペースメーカー交換術 第71号
胃瘻造設術 第5号
胃瘻造設時嚥下機能評価加算 第3号
入院時食事療養(Ⅰ) 第515号

保険指定取扱

健康保険 介護保険 結核指定医療機関 生活保護法指定医療機関
原爆被爆者一般疾病医療機関 特定疾患指定医 無料低額診療事業

歴代代表役員・院長・事務長・看護部長

代表役員

濱崎 タカ 1948年10月～1955年 5月
木口 マツ 1955年 5月～1975年 3月
濱崎 タカ 1975年 3月～1975年12月
濱崎 ミサヲ 1975年12月～1978年 3月
谷中 フジノ 1978年 4月～1985年 2月
中村 鈴代 1985年 2月～1997年 3月
奈切 シゲ子 1997年 4月～2009年 3月
久志 ハル子 2009年 4月～2021年 2月
下窄 優美 2021年 2月～

事務長

赤尾 ミト (不 明) ～1973年11月
大川 マス子 1973年11月～1978年 3月
長谷川 スナ子 1978年 4月～2023年 3月
田崎 幸一 2023年 4月～

院長

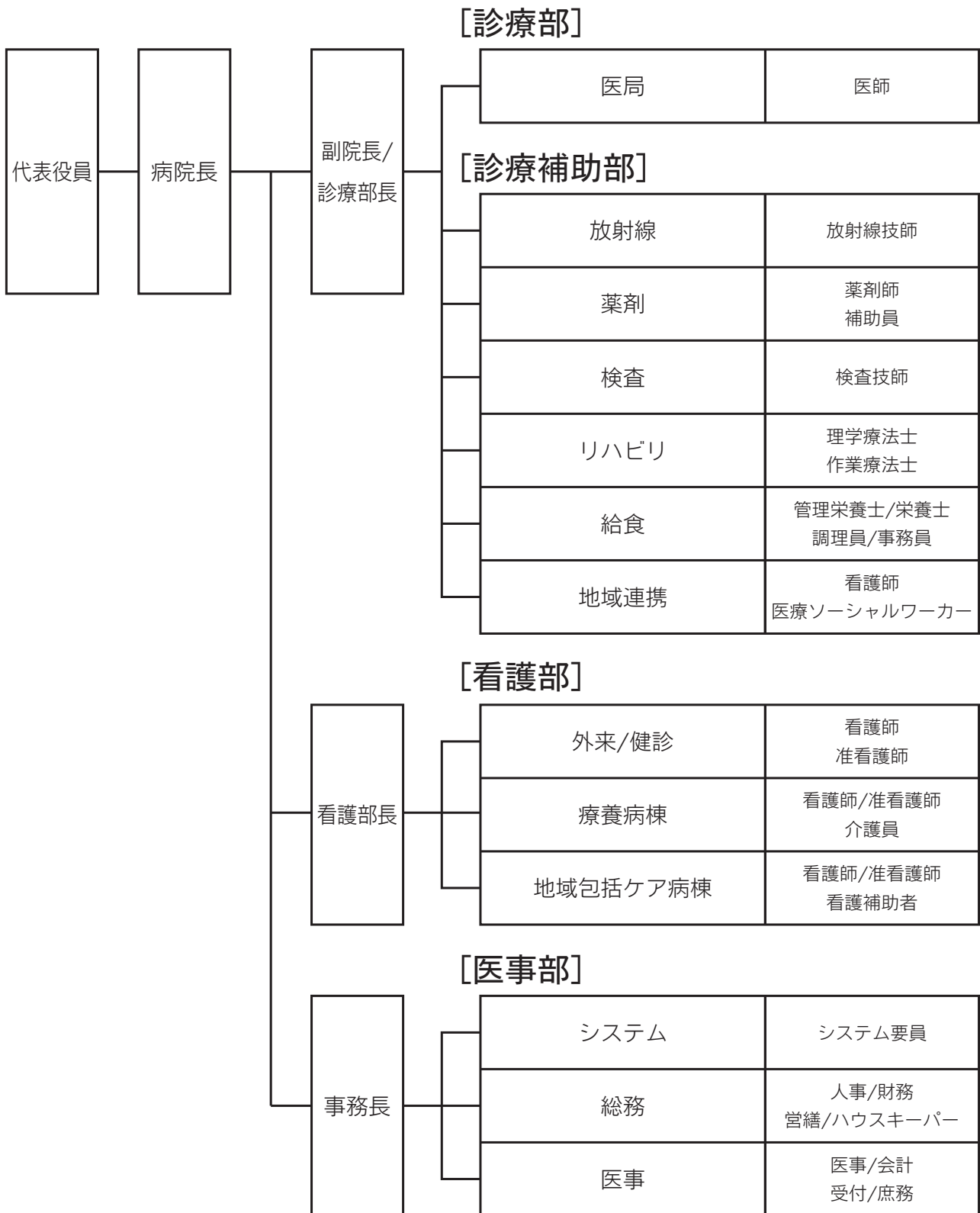
濱崎 タカ 1948年10月～1975年11月
濱崎 ミサヲ 1975年12月～1989年 5月
梅木 公子 1989年 5月～1989年 9月
松永 マサ子 1989年10月～1995年 6月
梅木 公子 1995年 7月～2017年 3月
山中 淳子 2017年 4月～

看護部長

越山 フジ (不 明) ～1977年 3月
道向 アイ子 1977年 4月～1996年 6月
水浦 ふじ子 1996年 7月～2011年 3月
眞浦 茅乃 2011年 4月～2020年 3月
洗川 久美子 2020年 4月～2021年 3月
森 久仁子 2021年 4月～

組織図

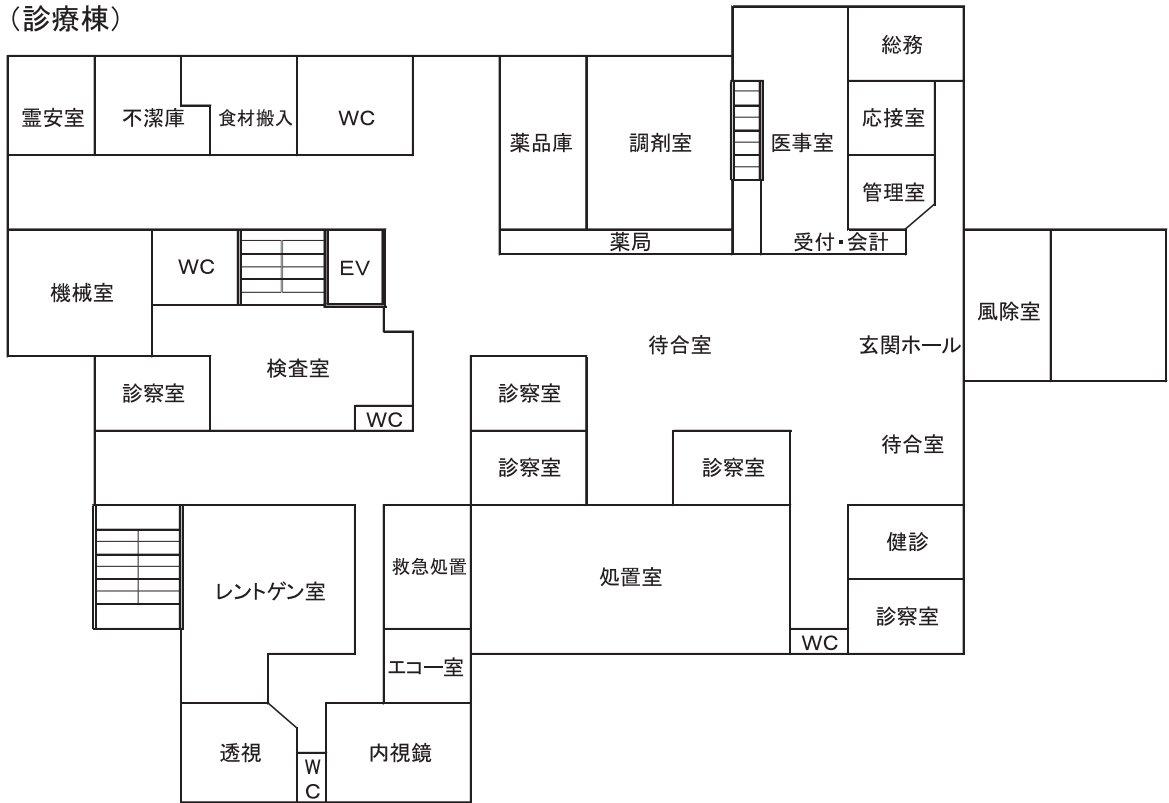
2023年4月1日現在



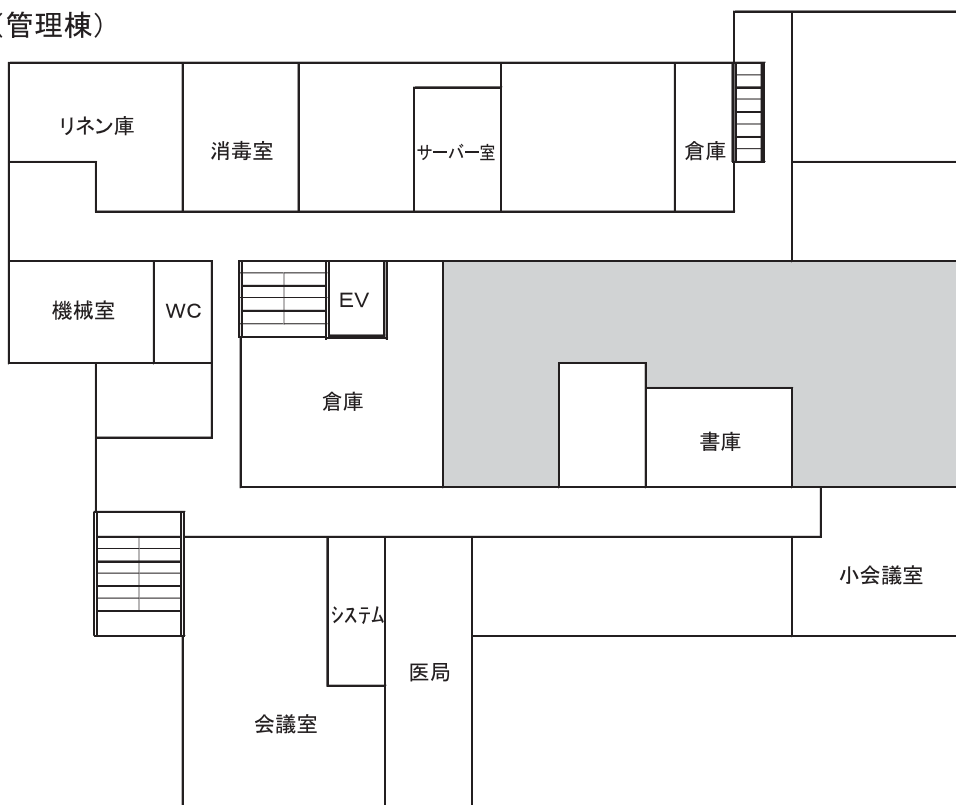
平面図

2023年4月1日現在

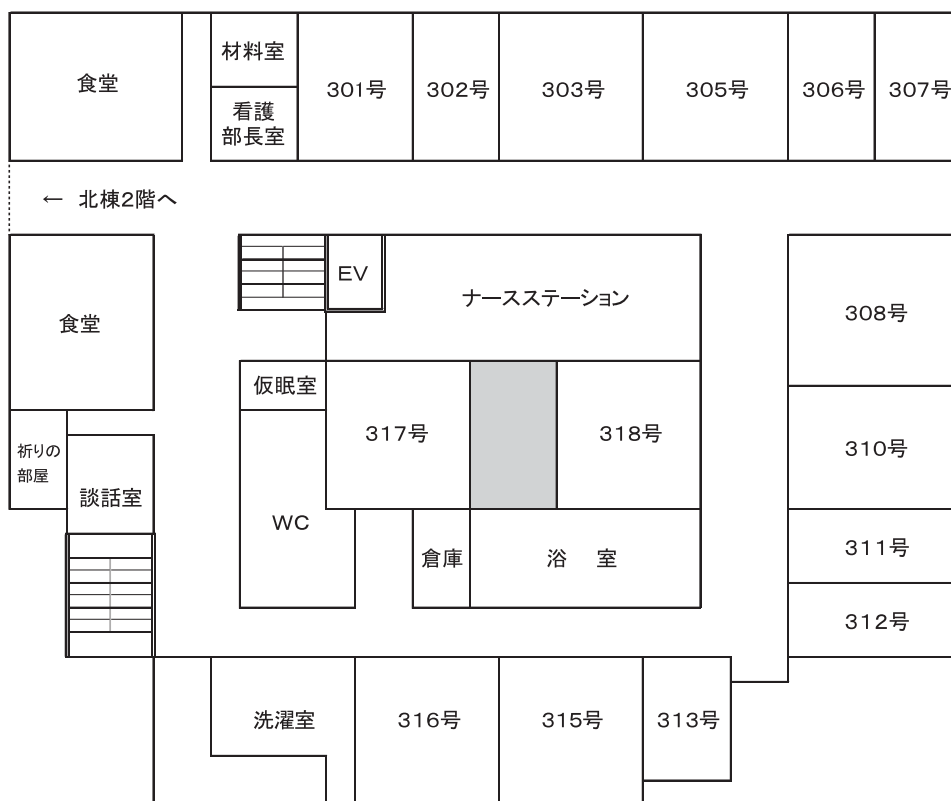
本館1階（診療棟）



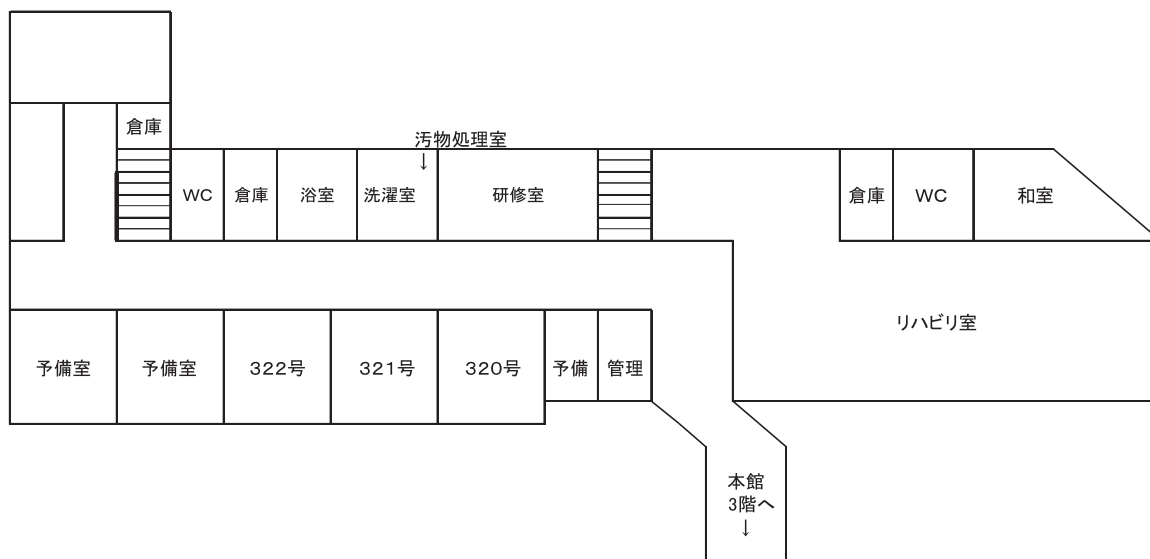
本館2階（管理棟）



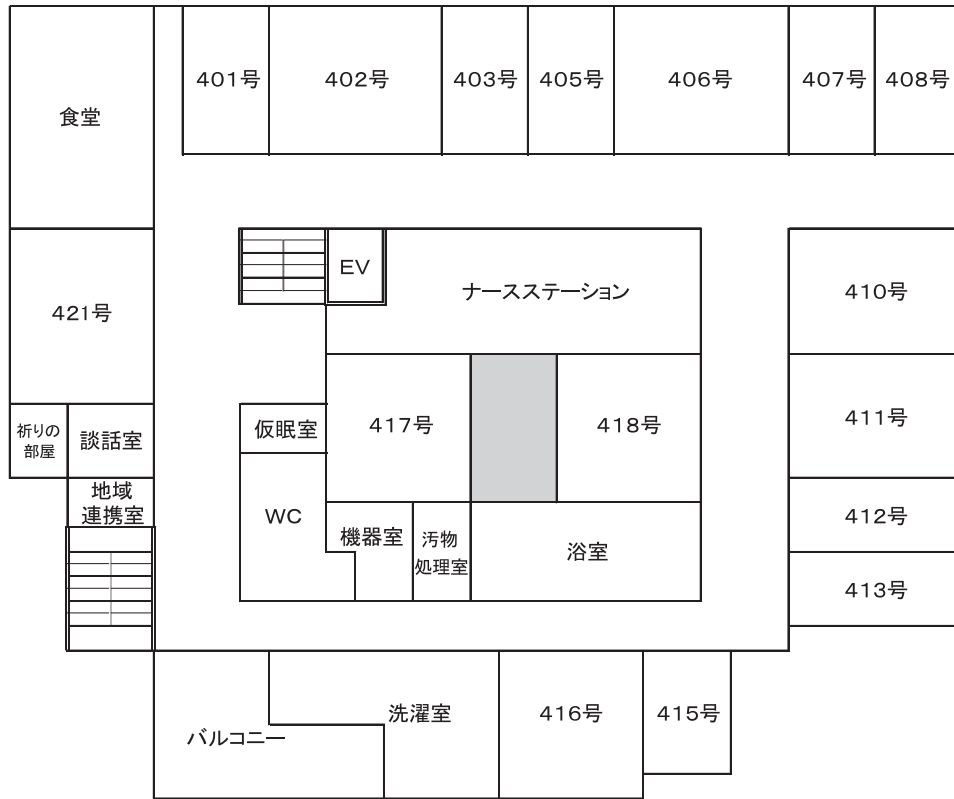
本館3階（療養病棟）



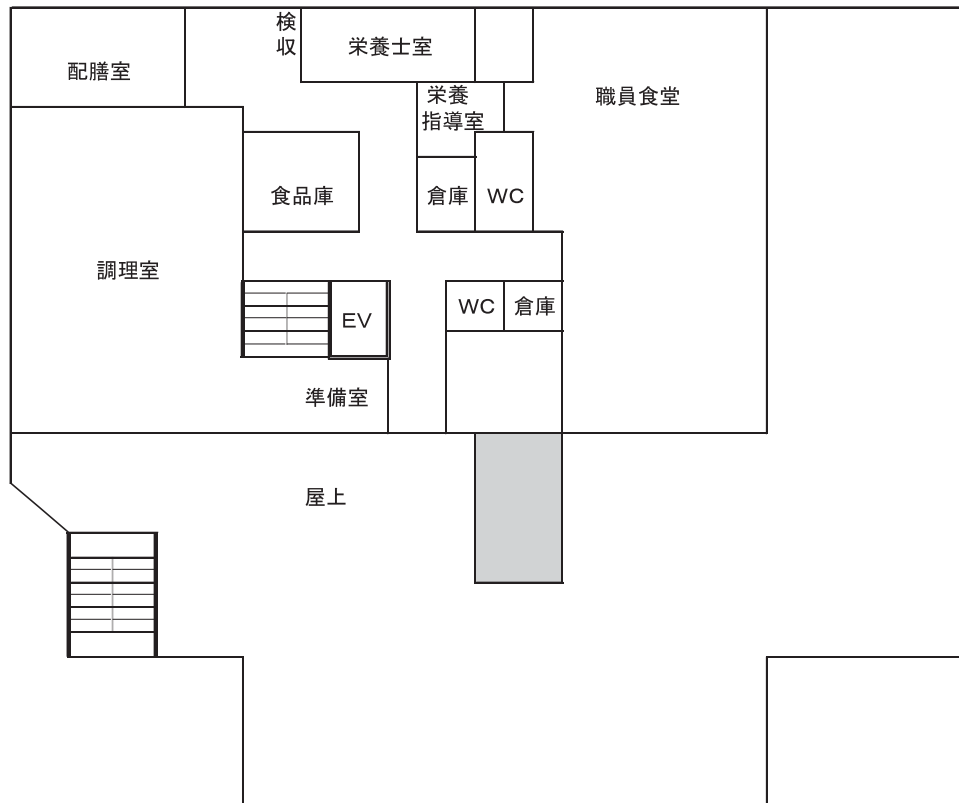
北棟2階（リハビリ室）



本館4階（地域包括ケア病棟）



本館5階（厨房棟）



病院沿革		カトリック・社会の動向
1880年（明治13年）	10月 マルマン神父、五島に着任 奥浦村大泊で子部屋始まる	
1883年（明治16年）	9月 大泊子部屋を堂崎に移転する	
1888年（明治21年）	ペルー師、五島に着任	
1899年（明治32年）	4月 ペルー師、奥浦赤瀬に土地を購入、開墾	日英通商航海条約が発効
1901年（明治34年）	1月 赤瀬に子部屋を移転	
1909年（明治42年）	9月 子部屋認可、養護施設奥浦慈恵院となる	伊藤博文、暗殺
1926年（大正15年）	4月 濱崎タカ、医師養成のための準備期間として派遣 静岡不二女学園に入学	昭和へ改元
1928年（昭和3年）	福江に助産院と精米所を開設	早坂司教長崎教区着座
1930年（昭和5年）	4月 濱崎タカ、東京女子医専に入学	第1回日本一健康優良児表彰式
1935年（昭和10年）	3月 濱崎タカ、東京女子医専卒業 医師免許取得	
1936年（昭和11年）	9月25日 奥浦村慈恵医院を開設	二・二六事件
1943年（昭和18年）	3月 濱崎ミサヲ、東京女子医専卒業 医師免許取得	
1948年（昭和23年）	10月5日 聖マリア診療所開設 開設者 財団法人奥浦村慈恵院 代表者 濱崎 タカ 診療科目 内科・小児科 10床	ザビエル渡来400年祭をカトリック復興委員会が企画 戦後初夏・冬季オリンピック開催
1951年（昭和26年）	9月 結核予防法医療機関指定（15床に増床）	サンフランシスコ講和条約締結
1955年（昭和30年）	4月10日 奥浦村慈恵医院・聖マリア診療所廃止 5月27日 聖マリア病院開設 開設者 宗教法人カトリック幼きイエズス修道会 代表役員 木口 マツ 診療科 内科、小児科 32床	土井大司教、日本人初枢機卿任命 長崎市とアメリカ合衆国セントポール市の都市提携成立 （日本初の姉妹都市）
1956年（昭和31年）	7月 結核病棟開設（一般18床、結核17床）	西坂殉教地、県史跡に指定
1957年（昭和32年）	6月 結核予防法医療機関指定 12月 生活保護法医療機関指定 完全給食実施承認	日本観測隊が南極大陸初上陸 東海村日本原子力研究所で日本初の原子炉臨界達成
1958年（昭和33年）	3月 無料低額診療施設届出受理 5月 61床に増床（一般31床 結核30床） 10月 健康保険法・生活保護法による基準給食実施施設承認	東京タワー完成 国民健康保険法制定
1959年（昭和34年）	2月 療養取扱機関申出受理通知書 9月 65床に増床（一般31床 結核34床）	原爆で崩壊した浦上教会再建、献堂式が行われる
1960年（昭和35年）	7月 70床に増床（一般36床 結核34床） 9月 原子爆弾被爆者指定医療機関指定	カラーテレビ放送開始
1962年（昭和37年）	12月 伝染病隔離病棟新設 1室3床	福江大火 類焼面積132,000㎡
1963年（昭和38年）	6月 102床に増床（一般63床 結核36床 伝染3床）	第2バチカン公会議（'62～'65）
1964年（昭和39年）	4月 伝染病棟3床廃止（一般63床 結核36床）	東京オリンピック開催
1965年（昭和40年）	8月 基準寝具実施施設承認 長崎県（寝）第87号	典礼が邦訳、日本語ミサ始まる
1967年（昭和42年）	病院新築 鉄筋コンクリート3階建	日本人の総人口が一億人突破
1971年（昭和46年）	2月 妊婦一般健康診査及び乳児精密健康診査委託契約	日本万国博覧会（大阪万博）開催
1972年（昭和47年）	6月 隣接地に特別養護老人ホーム聖マリアの園開設	沖縄の本土復帰
1973年（昭和48年）	6月 結核病棟36床廃止 一般病床99床	田口大司教、枢機卿に任命
1975年（昭和50年）	3月 開設者変更による病院開設許可 開設者 長崎県福江市松山町133番地 宗教法人 カトリックマリア修道会 代表役員 濱崎 タカ 12月 管理者及び開設者変更 代表役員 濱崎 ミサヲ	沖縄国際海洋博覧会開催 天皇、史上初めてアメリカ合衆国公式訪問

病院沿革			カトリック・社会の動向
1978年（昭和53年）	4月	開設者変更による病院開設許可 開設者 長崎県長崎市辻町131番地 宗教法人 お告げのマリア修道会 代表役員 谷中 フジノ	ヨハネ・パウロ2世教皇選出 里脇浅次郎大司教、枢機卿に任命 (1979.6)
1985年（昭和60年）	2月	開設者変更 代表役員 中村 鈴代	男女雇用均等法制定
1988年（昭和63年）	2月	基準寝具設備（病衣貸与）実施承認書	青函トンネル・瀬戸大橋開通
1989年（平成元年）	5月 10月	管理者変更 梅木 公子 管理者変更 松永 マサ子	平成へ改元 消費税開始（3%）
1990年（平成2年）	11月	開設場所地番変更 長崎県福江市松山町133番地2	長崎市市長・本島等銃撃事件
1993年（平成5年）	1月	開設者所在地変更 長崎県長崎市小江原町329番地2	長崎にて第2回福音宣教推進全国 会議(NICE II)が開催
1994年（平成6年）	4月	療養型病床群基準実施施設承認 54床療養病棟に変換	日本人初女性宇宙飛行士・向井千 秋さん宇宙へ
1995年（平成7年）	7月	訪問看護・訪問診療開始 管理者変更 梅木 公子	阪神・淡路大震災
1996年（平成8年）	4月	小児科外来診療科受理	
1997年（平成9年）	4月 5月	開設者変更 代表役員 奈切 シゲ子 久留米聖マリア病院より医師の派遣を受ける	日本二十六聖人殉教400年祭 消費税5%
1998年（平成10年）	10月	療養型病床群の整備に伴う用途変更及び改築	長野オリンピック開催
1999年（平成11年）	3月	病院新築工事着工	法施行後初の脳死移植実施
2000年（平成12年）	3月 4月	新病院落成 療養型病床54床を介護型へ転換 居宅介護支援事業所開設	大聖年（1999.12～2001.1） 介護保険制度開始
2001年（平成13年）	10月	病院開設許可事項の一部変更届 診療科目の追加 呼吸器内科	アメリカ同時多発テロ
2003年（平成15年）	7月	病院病床種別届 一般16室45床 療養18室54床	新型肺炎「重症急性呼吸器症候群 (SARS)」流行
2004年（平成16年）	1月 4月	開設者所在地変更 長崎県長崎市小江原四丁目1番1号 臨床研修協力施設承諾書 医療法人雪の聖母会臨床研修医の受入開始	聖体の年（2004.10～2005.10） イラク復興支援のため、自衛隊戦 闘地域派遣
2007年（平成19年）	7月 10月 12月	療養 介護45床→介護37床 療養 介護37床→介護29床 療養 介護29床→介護20床	「長崎の教会群とキリスト教関 連遺産」ユネスコ世界遺産暫定 リストに登録
2008年（平成20年）	7月	介護療養型全病床を医療型へ転換	ペト口岐部と187殉教者列福式 後期高齢者医療制度始まる
2009年（平成21年）	4月	開設者変更 代表役員 久志 ハル子	司祭年（2009.6～2010.6）
2011年（平成23年）	10月	病院開設許可事項の一部変更届 診療科目の追加 消化器内科	東日本大震災
2012年（平成24年）	5月	病院開設許可事項の一部変更届 診療科目の追加 リハビリテーション科	信仰年（2012.10～2013.11） 東京スカイツリー開業
2014年（平成26年）	5月	日曜日外来診療開始（月1回）	消費税8%
2017年（平成29年）	4月	管理者変更 山中 淳子	浦上四番崩れ150周年
2018年（平成30年）	4月	地域一般入院基本料1 45床	「長崎と天草地方の潜伏キリシタ ン関連遺産」世界遺産登録
2019年（平成31年）	4月	地域包括ケア病棟入院料2 45床 地域連携室設置	教皇フランシスコ来日 「令和」へ改元 消費税10%
2021年（令和3年）	2月	開設者変更 代表役員 下窄 優美	東京オリンピック開催
2022年（令和4年）	4月	オンライン資格確認診療開始	ロシアのウクライナ侵攻
2023年（令和5年）	10月	聖マリア病院、診療所設立75年	「旅（流配）」の終わり150周年

編集後記


この記念誌作成の目的は、創立者の意思を引き継ぐために、聖マリア病院の歴史を職員、地域の方々に伝えるという、どちらかといえば身近な人に向けての、特に職員に対する思いが強かったように思います。理念の継承をどうするかという課題にも向き合う作業でしたが、職員の日々の働きの根底に理念がしっかりと根付いているのを感じ、自分自身が豊かにされる機会となりました。最後になりましたが、祝辞をお寄せくださった方々をはじめ、職員はもちろん、たくさんの方々のご協力によって、聖マリア病院開設75周年記念誌「私たちの召命～病める人と共に75年～」を無事に発行することができました。心から感謝いたします。

事務部/事務員：岩崎 しのぶ 


空が澄み清々しい秋を感じる頃となりました。ちょうど1年半程前の夜勤明けの朝に院長先生が少し険しい表情で、記念誌の話を持ち掛けられたのを昨日のように覚えています。正直、「自分にはできる力がない」と思い、一度、断りましたが、院長先生の熱いアプローチに負け、記念誌の仕事を受けました。記念誌アルバムを作成するにあたり、「何か真面目過ぎるのは嫌だ。誰が見ても面白くて、飽きない。」記念誌にしたい色々な企画を出し、迷惑をお掛けしましたが、その度に記念誌メンバー、写真撮影された方々、メッセージ・インタビューに答えてくれた方々等、協力して頂き、すごく感謝しています。こういった経験は中々、できないので素直に「ありがとう」と言いたいです。そして、このアルバムを見てくれた方々が一人でも多く笑顔になる様、願っています。

看護部/介護員：山口 義生 

聖マリア病院75周年。この歴史の中に「神様の御業ここにあり」を実感したかったので、パソコン操作は不得意で迷惑かけると知りつつも参加させて戴きました。そして『神様の望まないことをしていた人間に歯止めを与えた奉仕。捨てられていた「命」を、生きる「命」に変えた奉仕。それは尊い大切な勤めで神様のみ旨を果たし歴史に残るものになった。』ことを知る事が起きました。神様が呼びかけ、先輩姉さん達が応えて必然的に生まれたマリア病院。ここで働く事の意味、それは神様の望むことをする。という確信に満ちたものでした。これからも私達が、この召命に応えることが出来ますように。この機会を与えてくださったことに改めて感謝します。

看護部/看護師：山本 ふみり 


先輩からのお話や日誌のような資料を拝見させていただくと目の前で起きていることに真摯に向き合い、一日一日自分のできる精いっぱいのことをしていくうちにこの病院ができた知り驚いています。これを成し遂げた私の近くにいそうな普通のお姉さん方を深く尊敬し、これから困ったことがおきてもコツコツやってゆけば乗り越えられると勇気と希望をいただきました。私は子どもの頃から困ったことがある時にだけ熱心にお祈りをし、神さまはいつもよいように取り計らってくださいました。今回の記念誌作成も神さまはそうしてくれたとしみじみ感じています。神さまの“あの手、この手”となって助けてくださった皆様に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

看護部/看護師：岩下 めぐみ 

聖マリア病院の成り立ちはある程度知っているつもりでしたが、記念誌作成に携わらせていただくことで、改めて気づき、そして深く知ることができました。75年の歴史がどのような経緯で始まり、どう紡がれてきたのか、奥浦慈恵院の院長先生から聞いた話が今でも印象に残っています。自分も先人たちの想いを胸に刻み、「自分を愛するように他人を愛しなさい」の理念を忘れず、自分のできることを精一杯やって、聖マリア病院を通じてこれからの地域社会に貢献していけたらと思います。

看護部/介護員：赤窄 純治 

これまでマリア病院の歴史を聞く機会は何度かありましたが、どこか「遠い昔の話」という感覚でしかありませんでした。この記念誌の企画を進めながら、病院のあゆみや実際に歴史のその地を訪れてみると時代に合わせて少しずつ変化していくマリア病院の歴史を身近に感じる事ができました。そして職員の皆さんの思い出や経験に触れる事で、普段難しく考えていた事も周りの助けを得ながら、マリア病院の一員として何ができるのか、これからの仕事の向き合い方も学べたように思います。本作り未経験だからこそマリア病院らしさが伝わる一冊になったと思います。今後も病院理念に沿いながら共に協力し、マリア病院を盛り上げていきたいです。

事務部/受付：眞倉 恵 

今回、過去チーム、現在・未来チームに分かれて記念誌作成を行いました。私は現在・未来チームとして活動し、職員同士の対談の中で、現在働いている先輩・後輩の話を知ることが出来ました。職員がどのような思いで働いているのか、今後どのような聖マリア病院になってもらいたいのか、それぞれ話しを聞くことが出来、新たな発見や改めて感じるものがありました。特に、職員の行動・考えは病院理念である「自分を愛するように他人を愛しなさい」に通ずるものがあり、また、この理念があるからこそ職員同士の繋がりも築き上げる事が出来たのではないかと感じました。これからも、地域に寄り添った優しい聖マリア病院を目指して行けたらと思います。

事務部/事務員：田崎 幸一 

75周年記念誌作成委員会

編集委員長：岩崎 しのぶ

副委員長：山口 義生

委員：山本 ふみり・岩下 めぐみ・赤窄 純治・眞倉 恵・田崎 幸一

オブザーバー：山中 淳子

聖マリア病院75周年記念誌

私たちの召命 ～病める人と共に75年～

発行日 2023年10月5日

発行者 宗教法人 お告げのマリア修道会 聖マリア病院

住所 〒853-0052 長崎県五島市松山町133番地2

編集 聖マリア病院75周年記念誌作成委員会

印刷・製本 (名)才津印刷所

